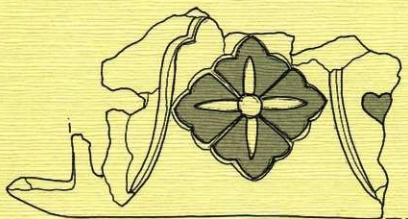


山梨県指定史跡

甲 府 城 跡 IV



1994. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

山梨県指定史跡

甲 府 城 跡 IV

1994. 3

序

本報告書は1993年度に山梨県埋蔵文化財センターが県指定史跡甲府城跡で実施した、発掘調査の結果をまとめたものであります。本調査は、都市公園整備事業に伴い、1990年度より当埋蔵文化財センターが実施しておりますので、本年度で4年を経過いたしました。

整備事業が城石垣の修復工事を中心としておりますので、調査も石垣の石材使用方法や裏盛土技法など、安土桃山時代に穴太積み技法によって構築された石垣技術の記録を主眼として行っております。特に、当時は石材加工用具と運搬用具の能力には一定の限界がある中で、10mを超える高石垣を構築したのでありますが、石垣各面ごとに石材の使用方法や勾配、反りなど千差万別であります。この背景を明らかにして今日の大修理工事に反映させて行くことは、本調査の大きな目的であると考え、石垣構造の調査を実施しております。これらを考慮の上、本年度は本丸北石垣・数寄屋曲輪石垣などの修復工事が行われました。

また、江戸時代の建物遺構の検出も同時に調査し、今年度は本丸におきまして鉄門跡と銅門跡の調査を行う中で、門の構造をある程度明らかにすることができ、今後も整備事業に生かすべく研究資料作りに取り組んで行くつもりでございます。

末筆ながら、甲府城調査検討委員会において種々ご指導を賜った先生方、現場でご助言をいただいた方々、また、調査にご協力をいただいた土木部都市整備課・甲府土木事務所・文化財保存計画協会、また、工事関係者や調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

目 次

第1章 調査経過

第1節 本年度までの経過	1
第2節 発掘調査検討委員会の経過	3
第3節 調査の方法と経過	9
第4節 甲府城の歴史的・地理的概要	11

第2章 発掘調査

第1節 本 丸	13
第2節 鉄門・銅門・鍛冶曲輪門・坂下門周辺	26
第3節 鍛 冶 曲 輪	31
第4節 天 守 台	35

第3章 石材調査

第1節 石材調査の概要	39
第2節 石材調査表	50

第4章 遺 物

第1節 瓦	56
第2節 石 造 物	59

例 言

1. 本書は1993年度に実施した山梨県指定史跡甲府城跡の整備事業に伴う石垣修復工事の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 整備事業は甲府土木事務所都市整備課が担当し、設計管理等は興文化財保存計画協会に委託された。
4. 本城には、甲斐府中城・錦城・赤石城・舞鶴城の別称があるが、本書では史跡の指定名称である甲府城跡を採用した。なお、都市公園としての名称は舞鶴城公園である。
5. 本年度の調査では、次の方々に貴重な助言を賜った。記して感謝申し上げたい。
深沢徳明・田中哲雄・服部英雄・中村博司・大津 透・吉村 稔・今泉俊文・上野晴朗・加藤充彦
森島康男・木戸雅彦・土山公仁・塚田順正・大島慎一・数野雅彦・朴 永周
6. 本年度の調査では、次の方々及び機関にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。
山梨県土木部都市整備課・甲府土木事務所・山梨県立青少年科学センター・株式会社文化財保存計画協会・
長田組土木株式会社・株式会社甲斐コーポレーション・株式会社早野組・早川工業株式会社・株式会社宝電組・
斎藤建設・大同建設工業・藤造園株式会社（順不同）
7. 本書の作成にあたり、次の方々々に貴重な資料を提供していただいた。記して感謝の意を表したい。
大和郡山城史跡柳沢文庫保存会・坂田典信・露木弘光（敬称略）
8. 本年度の調査に伴い、委託した事業及び委託先は次のとおりである。
石垣写真実測 —— 株式会社パスコ
光波測量機システム —— コンピュータシステム株式会社
瓦保存処理・胎土分析——財団法人帝京大学山梨文化財研究所
9. 本年度の調査調査担当者及び参加者は次のとおりである。
調査担当者 八巻與志夫・村松利恵子・柏木秀俊
整 理 員 弦間千鶴・野中はるみ・柏木まつ江
調査作業員 （順不同、敬称略）
村田勝利・保坂甲次・千野和策・須賀富雄・保坂 睦・三井清廣・小田切富夫・小田切政則・小林早苗・保坂太美保・細井志のぶ・塩田千代子・保坂実香子・守屋敏子・森下 豊・植松みどり・平 重蔵・平美与枝・矢崎米子・山村 章・小林克修・工藤忠誠・幡野岳史・松田拓也・長坂 清・志村 悟・坂本逸郎・山村文平・雨宮利光・土屋辰江・辻 昌次
10. 本年度の石垣修復工事に従事した方々は次のとおりである。
宮島秀夫・由良 匡・福重幸治・関口 忠・金沢政憲・松本政幸
11. 本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
12. 本報告書の作成は山梨県埋蔵文化財センター八巻與志夫・村松利恵子・柏木秀俊が行なった。

第1章 調査経過

第1節 本年度までの経過

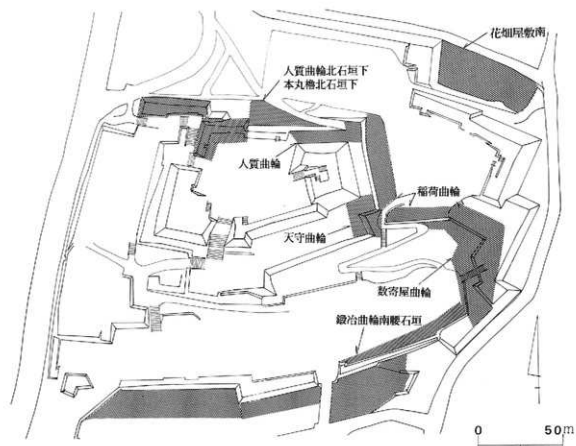
県指定史跡甲府城跡の発掘調査は、舞鶴公園設備検討委員会で昭和62年から平成元年までの3年間検討され、この整備方針に基づいた石垣改修工事に先駆けて実施するものである。

初年度にあたる平成2年度には、稲荷曲輪、人質曲輪北石垣下、天守曲輪、堀について調査を行った。稲荷曲輪の名称の根拠ともなった庄城稲荷社の跡地を中心に行った調査では、南側から稲荷門石段と柱穴、鳥居の柱穴、稲荷神社殿跡、庭園状遺構、方形井戸状遺構を検出した。また、天守曲輪では北東側隅、及び南側の一部で堀の基礎部分と曲輪側の腰石垣の一部を検出した。この場所においての石垣解体後の裏盛土調査では、地山と盛土の境に礫層を、さらに厚さ4mを越える盛土の中間にも礫層を確認した。石垣の天端は厚さ0.4mを越える粘土で防水層を構築していることも確認できた。堀の調査では、現況の遊亀橋より東側で行ったが、検出された遺物は明治以降のものが中心であった。これは、戦後に行われた浚渫のために、江戸時代の堀底が削られていたためであろうと考えられる。また、安政の大地震で崩落した石垣の状況を把握し、写真実測を実施した。

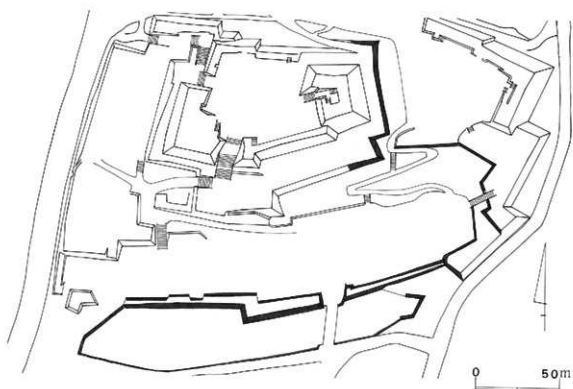
平成3年度は、花畑屋敷南、人質曲輪北石垣下、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪南腰石垣、堀について調査を行った。堀の調査では、石垣基礎である駒木や東側石垣裏より鎌倉時代末の木組井戸を検出した。井戸からは曲物の底である円盤状の板、土師質土器、常滑焼の底部破片、素焼き鉢の破片、漆器の椀などが出土した。検出された駒木は、堀の西側では赤松と考えられる針葉樹、東側では樺や櫟を中心とした落葉広葉樹であることが確認された。人質曲輪北石垣下は、平成2年からの継続調査で、多くの金箔瓦が出土した。数寄屋曲輪の調査は北西側を中心に行ったが擾乱がひどく、地形面は確認できなかった。しかし西石垣根石付近では築城時の2mを越える版築層を確認した。鍛冶曲輪南石垣は内堀に面した南側の位置にあり、石垣の裏側より非常に丁寧に施工された厚さ5~6mの版築層を確認した。

平成4年度は、鍛冶曲輪、数寄屋曲輪、稲荷曲輪、稲荷曲輪南腰石垣、本丸櫓北石垣下について調査を行った。鍛冶曲輪南腰石垣の調査は、曲輪の南東で数寄屋曲輪槽台下を中心に行い、腰石垣の芯が版築によって断面が台形状に突き固められていることを確認した。また、江戸時代中期の絵図に描かれている相坂、入坂の石段も検出した。数寄屋槽台石垣下の根石調査では、厚さ1mを越える前面盛土を確認した。これらの盛土は数寄屋曲輪西面石垣の根石調査でも確認されている。根石の前面への滑りを止めるために非常に堅くたたき締められた盛土である。鍛冶曲輪の腰石垣の復元工事では、検出された石段の位置に、絵図に記されている段数の石段が復元された。鍛冶曲輪から数寄屋曲輪へ登る石段の調査は、現状石段撤去後に行い、江戸時代の石段を一部検出した。復元した石段は、検出した石段と絵図にある段数を総合して設計されたものである。この曲輪の石垣の解体に並行する調査では、石垣の構築順序から、稲荷曲輪門から東に伸びる石垣が積まれ、その後数寄屋槽台の石垣が築かれ、数寄屋曲輪西側の石垣が造られて数寄屋曲輪が形成されたことが明らかとなった。槽台上面の調査では、礎石などは検出できなかったが、「違い鷹の羽」を表した鬼瓦の一部が出土した。稲荷曲輪南石垣の調査は、初年度に行った継続である。地山は凝灰岩を中心とした岩盤で、その上に黄色粘土と凝灰岩礫を中心とする土を交互に突き固めた版築による埋め土によって曲輪面を造成していることが確認された。また、稲荷曲輪門の調査では、地山と盛土の間に設置された暗渠を検出した。この暗渠は石垣復元工事のときに改めて復元された。本丸櫓北石垣下の調査は、本年度で3年目である。本丸櫓が破却された時に大量の瓦、屋根土、壁土が北石垣下に落とされ、2mを越える厚さに堆積している。この部分の調査を行い、根石付近より獅子を象った金箔隅蓋瓦など多くの金箔瓦が出土した。

なお、発掘調査と並行して3年間に出土した金箔瓦、昨年度出土した木組井戸の井戸枠と、漆器の椀などの保存処理と復元作業を行った。また本城出土の金箔瓦と大坂城・聚楽第など近畿地方の城郭から出土した金箔瓦の胎土分析を中心に比較検討を行ったが、類似性は確認されず、本城出土の金箔瓦は、甲府盆地の土で焼かれたことが改めて確認された。



第1図 調査済箇所位置図



第2図 改修済石垣位置図

第2節 発掘調査検討委員会の経過

山梨県指定史跡甲府城跡の石垣修復工事に伴う発掘調査にあたり、関連分野から調査結果を検討し、整備に活かすことを目的に設けられた甲府城跡発掘調査検討委員会は、本年度は以下の構成で3回の委員会を開催した。

平成5年度甲府城跡発掘調査検討委員会構成

委 員	磯 貝 正 義	山梨県文化財保護審議委員会長
	北 垣 聡 一 郎	奈良県立橿原考古学研究所員・文学博士
	清 雲 俊 元	山梨県文化財保護審議会委員
	佐 藤 八 郎	山梨県文化財保護審議会委員
	十 菱 駿 武	山梨学院大学一般教養部教授
	関 口 欣 也	横浜国立大学工学部教授・工学博士
	田 畑 貞 寿	千葉大学園芸学部教授・工学博士
	谷 口 一 夫	山梨県文化財保護審議会委員
	野 沢 昌 康	山梨県文化財保護審議会委員
	萩 原 三 雄	帝京大学山梨文化財研究所研究部長
事業主体	保 坂 敬 夫	山梨県土木部都市整備課長
	広 瀬 武 仁	山梨県土木部都市整備課補佐
	伊 藤 守	山梨県土木部都市整備課公園担当
	滝 沢 勉	山梨県土木部都市整備課公園担当
	山 本 博 茂	山梨県甲府土木事務所都市整備課長
	佐 野 修 平	山梨県甲府土木事務所都市整備課公園担当
	酒 井 由 和	山梨県甲府土木事務所都市整備課公園担当
設計監理	川 上 敏 朗	株式会社文化財保存計画協会
史跡管理	丸 山 義 朗	山梨県教育委員会学術文化課長
	竹 井 保 久	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
	小 野 正 文	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
	保 坂 康 夫	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
事務局	大 塚 初 重	山梨県埋蔵文化財センター所長
	森 和 敏	山梨県埋蔵文化財センター調査研究課長
	八 巻 興 志 夫	山梨県埋蔵文化財センター調査研究課第4担当
	村 松 利 恵 子	山梨県埋蔵文化財センター調査研究課第4担当
	柏 木 秀 俊	山梨県埋蔵文化財センター調査研究課第4担当

3回の委員会の議事内容を以下に記す。委員の発言は「・」、事業主体側の発言は「@」、事務局の対応は「*」で表した。なお、議事内容については、毎回の委員会で前回の議事録として承認を得たものである。

平成5年度第1回調査検討委員会議事録

日 時 平成5年5月21日(金)午前10時～午前12時
会 場 甲府城跡発掘現場事務所

会議内容

発掘調査中間報告について

- ・水抜き暗渠の築造方法に差異は認められるのか。
- ＊堀のものについては大規模な拵を伴う形態であった点が異なるが、その他の暗渠については、とくにありません。
- ・水抜きの施設は、地山と盛土のどちらに設けられているのか。
- ＊稲荷門部分の暗渠は、地山と盛土の境で検出されている。本丸の暗渠はすべて客土中のもので、どれも地山を掘込んではいません。
- ・水抜きはすべて築城期のものか。
- ＊穴太積み石垣の中のみ確認されているので、そのように考えています。
- ・資料に載っている鬼瓦の大きさはどれくらいか。
- ＊実物をご覧ください。柳沢家の家紋である花菱を形取ったものであろうと思われます。^(表)
- ・『甲府市30年史』に類似した鬼瓦が載っていたと思うが。
- ＊参考させていただきます。
- ・本丸で調査中の検出された石垣については、一蓮寺のものであるということを含めて、再検討の必要があるのではないか。
- ＊トレンチ調査の結果、検出された石垣と本丸西側の高石垣の裏栗層がつながっているので、甲府城築城以降のものだと思われます。

今後の整備工事工程について

- ・工事予定の中で建築物を、という考えだが、具体的計画はどうなっているのか。
- ＊設計委託を今年度中に考えています。文化財建造物保存技術協会に門と櫓の復元を依頼する予定です。工事着工は、今年末か来年度と思われます。
- ・文化財建造物保存技術協会なら無難だと思うが、専門委員会などを設けてチェックする場を作ったほうが、より良いものができると思う。宮上茂隆氏を委員に加えたら良いと思う。
- ＊文化庁の田中主任調査官に4月に来ていただき、相談はしているので、また先生方にもご助言をお願いします。
- ・建築物の復元にあたっては、その設計の際の基礎資料を欲しい。どの時代のどの資料に基づいた復元かをはっきりしてほしい。

平成5年度第2回調査検討委員会議事録

日 時 平成5年9月3日(金)午後1時30分～5時20分

会 場 甲府市社会教育センター

会議内容

発掘調査中間報告について

- ・スライドで見た絵図の信憑性はあるのか。
- ＊お見せした絵図は、露木家所蔵のもので、柳沢文庫所蔵の修築を願いたものと同じですので、信憑性は極めて高いです。しかし、門の表現については忠実でないと思われます。
- ・現在建っている謝恩塔の位置は、絵図ではどうなっているのか。
- ＊(絵図で示し)腰石垣が廻っている平地です。
- ・本丸北西石垣の裏から石塔が多数出土しているが、今までの他の場所での調査ではどうだったのか。

- *堀石垣の裏などで2・3点確認されているだけで、このように出土したのははじめてです。
- ・出土した五輪塔・宝篋印塔の時期はいつ頃か。
- *室町頃と思われます。
- ・一蓮寺のものと比較調査すると良いのではないか。
- *早速検討します。

今後の整備、工事工程について

- ・これまでの石垣修復工事の実績は高い評価を得ているので、今後も従来の方針に沿った整備を進めてほしい。建造物についても、例えば偽物3つよりも本物1つを。

堀北側の防護柵について

- ・土木の提示した2つのイラストでは、白壁を用いたものの方が良い。
- ・城としての景観を考える時、白壁は最も効果的であるので、城の核となる部分には漆喰を用いた本瓦葺きの白壁が望ましい。
- ・塀の距離を伸ばすよりも、質を重視してほしい。

管理事務所とトイレ3棟について

- ・城まがいの建物の建築はすべきではない。
- ・設計段階から、熟考を要すると思われる。
- ・公園機能とはいえ、建物を建てる際には、文化財審議会にかける約束をしてほしい。学術文化課でも現状変更は慎重に扱ってほしい。

日本庭園について

- ・土木サイドが示したイラストでは、どのような庭園ができるかわからないので、もっと具体的な設計を出してもらい検討したい。
- ・庭園全体の具体的な設計は勿論だが、さらに植栽についても石垣に悪影響を及ぼさないように十分な計画が必要である。

その他

- ・鉄門は楼門の可能性もあるので、精査が必要である。
- ・建造物に外材を使った他の例を見ると、割れやひびなど欠陥が多いので、国内産の材質が望ましい。
- ・建造物については、復元するものと整備するものの区別をはっきりしてほしい。
- ・外覧施設についての計画はあるのか。
- *現在のところ、恩賜林記念館の2階を資料展示室に考えています。
- ・新聞紙上で青少年科学センターの移転問題が取り上げられているが、移転した後、建物はどうするのか。
- *旧状に復します。芝生広場のようなものを考えています。

平成5年度第3回調査検討委員会議事録

日 時 平成6年3月8日(火) 午後1時30分～4時

会 場 甲府城跡発掘調査現場事務所

会議内容

発掘調査中間報告について

天守台について

- ・天守台の裏構造について、すべて栗石層だったということだが、これは人工的に現況の高さまで高くしたということか。

- * 天守台の石垣解体による調査で、石垣内部はすべて大小の礫だということが確認されましたから、本丸で確認された地山から8mほどの現況天守台天端の高さまで栗石で盛っていると思われます。(後日変更する。)
- ・天守台検出の礎石について、塙の礎石らしいということだが、これは天守閣と併存したということか。
- * 江戸中期の絵図によると塙のみが描かれているので、天守閣が存在した(としたら)以降の塙の礎石だということです。築城期のもではなく、时期的にはもっと下ったものだと思います。
- ・セクション図をみると漆喰が出土しているようだが、建造物が建っていたということか。
- * 塙のものと思われます。
- ・天守台の修復では旧石材をどれくらい用いたものか。
- * 70%の旧石材が元の位置に戻りました。掘り出された石材を含めれば75%程です。
- ・栗石のみで天守台を構築するのは全国的にみられることか。
- * データが少ないのではっきりわかりません。後日データを収集したものを示させていただきます。

鍛冶曲輪について

- ・鍛冶曲輪から出土した板材と池らしき遺構との関係はどうか。
- * 板材は18~19世紀にかけてのものと考えられますので、それと同時期かそれ以前から池があったと考えられます。板材が出土した箇所は、明治10年には葡萄酒醸造所が建てられましたので、遅くともそれ以前のものだと思います。ただし、同一土層からは棧瓦が出土しています。
- ・板材の時期はいかにして測定したのか。
- * 木製品に詳しい前筑波大学助手の山田昌久氏に現場で見えていただいた結果、杭や板材に残る加工痕によって工具の時期がわかるそうです。

今後の整備、工事工程について

鍛冶曲輪門について

- ・鍛冶曲輪門の北部分の石段の詳細はどうなっているのか。
- * 石段の高さは2 m50cmです。絵図によると番所があった場所ですが、発掘調査の結果遺構は検出されませんでした。
- ・鍛冶曲輪門は四脚門とも呼んでいるが、整備する際に用いる正式名称は何か。
- * 正式には鍛冶曲輪門です。四脚門は門の形状を言うものです。
- ・鍛冶曲輪門で礎石の痕跡がヶ所検出されたということだが、本来はいくつの礎石があるべきなのか。
- * 5つです。
- ・鍛冶曲輪門は絵図と一つの礎石の痕跡だけで復元できるのか。
- * 図書館の元文年間の絵図に門の寸法が詳細に書かれているので可能です。
- ・鍛冶曲輪門周辺調査で瓦は出土しているのか。
- * 出土しています。門については勸文化財建造物保存技術協会の五味盛重氏にお願いして設計中です。鍛冶曲輪門で出土した軒平瓦を提示して門復元の参考にさせていただく予定です。
- ・その際の時代の瓦を使うのか。
- * 絵図が残っているのは柳沢の時代ですから、その頃が復元の目標です。
- ・鍛冶曲輪門の石垣は、築城期のままなのか。
- * 昭和40年頃に修復したようです。
- ・戦後に番号を付して解体修理がなされたこと記憶している。
- ・絵図の頃の門を復元すると、修復された築城期の石垣の上に江戸中期の門がのるということで、整備方針に統一性がないのではないか。

- *先程申しましたように資料が残っているのは柳沢の時代のみですので、その時代に存在していた石垣や門に戻るのが当初から一貫した整備方針です。

石垣裏盛土工法について

- ・ジオテクスタイルという工法は古くからの“そだ”技法と同様だということだが、その古くからというのは具体的にいつか。
- *江戸期に土手などで使われた技法です。
- ・石垣にはこういう工法は使われているのか。
- *確認されていません。盛岡城関係の資料に“そだ”はでてきていますがどのような使い方をしたかはわかりません。
- ・平成2年度の修復した天守曲輪石垣の出隅でも何回かの積み直しがされたようだったが、調査で確認された栗層と粘性土の互層の裏盛土という工法で修復したように、今回もその工法ではダメなのか。
- *今回の石垣の高さと勾配を考えると無理だと思います。
- ・プラスチック材の耐久性はどうか。
- *地表に近ければ劣化が激しいでしょうが、この場合は地中なので大丈夫だと思います。
- ・富山県の城屋形でジオテクスタイルを用いているようだが、同様な事例か。
- *これは石垣ではなく、土手でのご使用だと思います。
- ・本来なら全国的に甲府城よりも高い石垣もあるのだから、文化庁などによる修復方針が示されていれば従うべきだが、現在はまだそういったものがないので十分な議論をお願いしたい。
- ◎事業主体の土木部としては、都市公園としての安全性や管理責任の問題、建設省の安全基準を越えた工事を国庫補助事業として実施するにも問題がありますので、これらを考慮してこの工法を提示していきます。そのへんも考慮していただきたいと思います。
- ・今回対象となる部分は、勾配が急だからというが、それはなぜか。
- *地形の制約だと思われます。
- ・これだけの問題は、取って今回工事せずにもっと時間をかけて議論をするべきではないか。
- ◎この工事は既に発注され、平成7年度完成予定です。
- ・この問題は、当初の石垣の裏に現代工法のコンクリートを用いるか、伝統工法の空積みにするかという議論と同じではないか。
- ◎ただしこの工法の根本は石垣が危険だからその安全を確保するためですから、その点を考慮していただきたいと思います。
- ・ジオテクスタイルとは外国の技法なのか。
- *ジオとは土の意味でテクスタイルとは織物の意味です。この考え方の根本は、フランスで生み出されたものです。工法的には歴史は浅いです。
- ・ではこの工法を採用することによって、100年もつところが200年になるという確証はあるのか。
- *まだありません。技術的には充分で、材料の劣化云々の話しだけだと思います。
- ・世田谷区の近世民家移築の場合、現代工法を全く用いなかったら、復元途中に台風で倒壊し、再度の工事の時にはセメントなど用いた事例もある。見えない箇所では現代工法もいたしかたないのではないか。
- ・この工法を用いた城郭の修復の事例がもっとあれば安心なのだが。
- *いまのところありません。
- ・新しい工法ははなはだ不安だが、公園としての安全性を考えるとこれが現在では一番の方法なら取り入れざるを得ないのではないか。
- ・外観上は石垣の歴史的景観を維持できるのか。
- *できます。

・この工法は今後を見通してこの箇所だけの採用なのか。

@そうです。

・この新工法導入にあたっての経過は議事録として明確に残し、工事の記録も報告書に克明に明記してほしい。

*了承いたしました。

・新工法導入予定の石垣について現場を見た結果、解体してみないと裏の様子がわからないので、それから状況に変化が見られた場合は再度、会議にかけていただきたい。

その他

・現在城内に建っている建物の移転はどうなっているか。

@県立青少年科学センターは、機関車を含め愛宕山こどもの国へという方向で移転計画があります。年度についてははっきりとは言えませんが、近い将来に移転いたします。議員会館については、県庁舎の建て替えと連動する問題だと思われますが、これはまだ未定で、その他についてもまったく未定です。

・謝恩碑の移転は計画されていないのか。

@当初の整備方針としてシンボルとして残すことになっていますから、移転予定はありません。ただし、塀や門、櫓などできてくると景観上ふさわしくないとすれば、今後の検討課題となるかと思います。その際は県庁舎移転などの大プロジェクトと併せて考えていくことになると思われます。

・石垣の修復もだいぶ進み、塀や門といった建造物が出てきた現在、また改めて基本構想を練り直し、方針を考えていく必要もあるのではないかと。

・周辺の民家についてはどうなっているのか。

@民家25軒（現在移転問題をつめている天守曲輪の茶屋を含む）については、工事が着工された平成2年から交渉中です。

・今後の建造物復元の予定はどうなっているのか。

@今回復元の鍛冶曲輪門のほか、木丸櫓と鉄門、銅門、中の門、稲荷門、梅林門と天守台の四阿や防護柵としての塀が予定されています。後は個々でまた検討していきます。

・稲荷曲輪北側の高石垣（JR線より見える）は、孕んでいるように見えるが、修復予定には入っているのか。

*詰め石をする程度で充分だと思います。

・武徳殿西側の石垣も傷みがひどいがどうなっているのか。

*曲輪の形状もだいぶ変わっておりますので旧状はつかんでおりません。

・その箇所はかつて温泉の水源があり、水路があったと記憶している。その関係で地盤が弱く、石垣の傷みもあるのではないかと。



第3図 委員会現場視察（本九西）



第4図 委員会現場視察（本九東）

第3節 調査の方法と経過

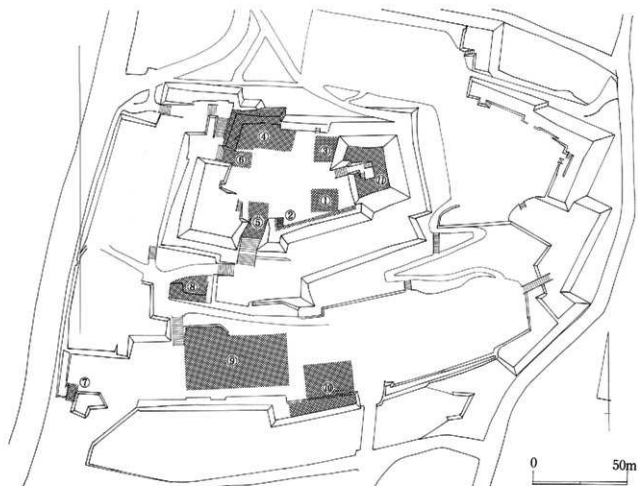
(1) 調査の方法

現在行われている甲府城の石垣修復工事は、傷んだ石垣の修復を中心に実施しているが、修復工事には詳細な現況図面が必要不可欠である。しかし、対象となる石垣は高さ3～15m、長さが100mを越える巨大なものであり、人手による実測作業には限界がある。また本調査は石垣修復工事に先だって着手し、石垣解体工事と並行して行うため、限られた調査期間の中でよりいっそう効率的に発掘調査を行う必要がある。そのため、高石垣の立面・断面図の作成には写真測量を採用している。写真測量図面は設計図面・施工図面に使用するとともに石垣解体調査に使用する番付図面にも利用している。

遺物・遺構の記録作業には平板測量とやり方測量を実施するが、基本的には光波測量機を使用したコンピューター測量を導入している。この方法では、計測時間が短縮されると同時に計測後の図化作業では縮尺を任意に設定でき、さらに他の図面との接合が容易であるなどの利点がある。しかし、現場で計測したデータを図面にするには、電子野帳からコンピューターに取り込まなくてはならない、また誤動作による誤ったデータのチェックが困難などの短所もある。このコンピューター測量システムを利用して、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・鯉瓦・金箔瓦・釘・陶磁器などの遺物を取り上げ、それらの分布の検討に役立てている。また、写真測量ができない石垣の平面図・断面図作成にも活用している。

(2) 今年度の調査経過

4月7・8日	坂下門石垣根石調査	8月25日～9月9日	本丸鉄門北調査
4月12日	掛川城視察	9月2日～11月11日	鍛冶曲輪米蔵跡調査
4月13～9月26日	天守曲輪西調査	11月14日～12月20日	鍛冶曲輪井戸跡調査
4月14～27日	鍛冶曲輪門腰石垣調査	11月17日～12月20日	鍛冶曲輪東調査
4月14～5月13日	松陰門調査	1月9日～17日	JR身延線跡堀跡調査
4月15～19日	本丸北調査	1月25日～	人質曲輪北石垣下調査
4月21～8月8日	稲荷曲輪北腰石垣調査	3月6日～7日	掛川城・駿府城視察、 第2回発掘調査
4月25～28日	天守台穴蔵調査		
5月9・10日	鍛冶曲輪門石垣解体と それに伴う石材調査		検討委員会
5月11・12日	鍛冶曲輪門石垣根石調査		
5月13～25日	天守曲輪南石垣下調査		
5月18・19日	松陰門石垣解体と それに伴う石材調査		
5月26日～6月3日	松陰門石垣根石調査		
6月22日～7月15日	鍛冶曲輪門東石垣調査		
7月21日	第1回発掘調査検討委員会		
7月27～29日	鍛冶曲輪門東石垣解体と それに伴う石材調査		
8月1～8日	鍛冶曲輪門東石垣根石調査		
8月1・2日	二の丸南石垣解体と それに伴う石材調査		



第5図 本年度調査区位置図

- | | | |
|------------------|----------------|---------------------|
| ①本丸毘沙門堂跡…第2章第1節 | ②本丸南腰石垣…第2章第1節 | ③天守台西側下庭園状遺構…第2章第1節 |
| ④本丸北石垣…第2章第1節 | ⑤鉄門…第2章第2節 | ⑥銅門…第2章第2節 |
| ⑦鍛冶曲輪門…第2章第2節 | ⑧坂下門周辺…第2章第2節 | ⑨鍛冶曲輪西側…第2章第3節 |
| ⑩鍛冶曲輪南腰石垣…第2章第3節 | ⑪天守台…第2章第4節 | |



第6図 調査風景 (本丸北石垣)



第7図 調査風景 (坂下門周辺)

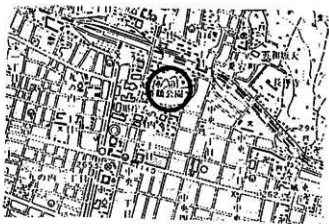
第4節 甲府城の歴史的・地理的概要

甲府城跡は、昭和43年(1968)に県指定史跡として公示された県内唯一の近世城郭跡である。本城は甲府市街地の北東に位置する愛宕山(標高428m)に隣接し安山岩質の小高い独立丘に築城された。中世には一条小山と呼ばれ、甲府盆地の北側の山沿いに位置する一条庄に属していた。平安時代末期には武田信義の嫡男である忠頼がこの地に入り、荘園の中心である一条小山に館を構えて一条氏と称した。鎌倉幕府成立の過程で、強大化した甲斐源氏一族を対象にした肅正にあい元暦元年(1184)鎌倉において謀殺された。夫の死を悼んだ夫人は剃髪して尼となり、館の跡に庵を建てて尼寺とした。忠頼の死後の一条氏は弟信光の男信長が継いだ。信長の孫にあたる甲斐守一条源八時信は、二世遊行上人他阿真教に帰依し、正和元年(1312)に一条小山にあった尼寺を僧寺に改め、時宗稲久山一蓮寺とした。以後一蓮寺は甲斐源氏縁の寺として中世を通して当地に営まれ、山門前には湯田と呼ばれる門前町を形成する賑わいをみせていた。

甲斐国における戦国時代の動乱の終焉となった天正10年(1582)の武田家滅亡後に、名刹一蓮寺にとっては創建以来の重大事件が発生することとなる。それは、甲府城築城に先立つ寺の移転命令であった。甲府盆地を一望にすることができ、かつ周辺には広大な城下町を形成できる平地と重要な輸送手段である水運が確保できるといふ一条小山の地は、新たな甲斐領有の拠点となる甲府城築城場所としては最適地であった。さらに、甲斐源氏の氏寺であり甲斐の名刹である一蓮寺を移転させることは、為政者の力を領民に示す重要な政治的な意味合いも持ち合わせていたであろう。この移転命令を最初に出したのは豊臣秀吉の家臣で天正19年に甲斐国を拝領した加藤光泰であったと言われる。しかし、『甲斐国志』は村里部蔵田村の条で天正17年伊那郡蔵地の時「三年を越えずして必ず此処へ府城を遷されん」と記し、天正10年秋以降天正18年まで甲斐を領有していた徳川家康は既に一条小山に新たな城を築く計画をもっていただことを窺わせる。

天正18年夏に小田原攻が終了すると、秀吉は徳川家康を信濃・甲斐・駿河・三河から関東に移封させた。これは、強大な徳川勢力を関東に封じ込め、その周囲に豊臣方の諸大名を配置して、家康の動きを牽制する計画のもとに行われた政策であった。駿府には中村一氏・松本には石川数正・会津若松には蒲生氏郷・小諸には千石氏・諏訪には日根野氏・飯田には京極氏、上田には真田氏、甲府には秀吉の甥の羽柴秀勝が入った。翌年4月には加藤光泰が替わり文禄2年8月に朝鮮で病没するまで甲斐を領有し甲府城築城を精力的に進めた。その後は浅野長政・幸長父子がそれぞれ5万石余・15万石余で入甲して築城工事を進め、慶長5年には一応の完成をみたと言われる。同年の関ヶ原の戦いの戦功によって幸長は37万石余りで紀州和歌山へ移封した。甲斐は再び徳川領となり、平岩親吉は甲府城代として入り、甲府城の修築を加えたと『甲斐国志』などにみえる。

慶長8年(1603)家康の男五郎太(義直)が甲斐を拝領し、平岩親吉は城代として実務を執っていた。が同12年に義直は尾張へ移封となり、親吉も尾張藩の家老として犬山城主となり義直を支えた。親吉移封後の甲府には城番を置き、主に甲斐出身の武川十二騎が務めた。元和2年(1616)には二代将軍秀忠の三男忠長が駿河・甲斐・信州佐久郡を拝領したが、寛永9年(1632)に高崎において自刃する。この後は再び城番制が実施された。その後慶安4年(1651)に三代将軍家光の三男綱重が甲斐国内で15万石を受封し、寛文元年(1661)には10万石が増加され甲府城主となった。当時は尾張・紀州・水戸の御三家に綱重の甲府家・弟綱吉の館林家を合わせて五卿とも言われた。延宝6年(1678)には綱重の男綱豊が跡を継ぎ、宝永元年(1701)には五代将軍の養子となり

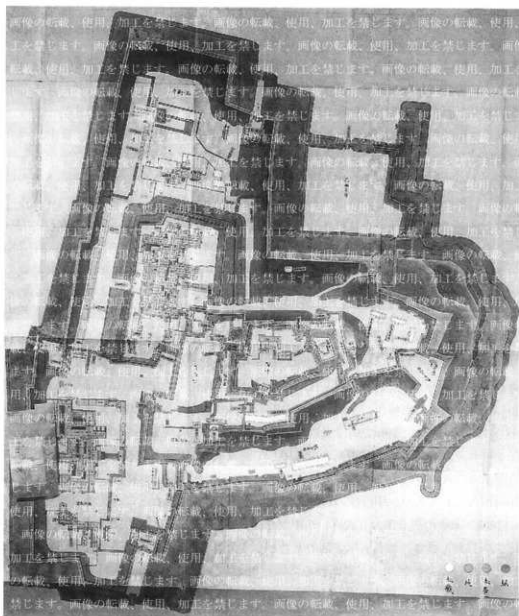


第8図 甲府城跡位置図 (1/25000)

綱吉没後は六代将軍家宣となった。

宝永2年には5代将軍の側用人として権勢を誇った柳沢吉保が甲斐国内15万余りを拝領して甲府城主となった。柳沢家は甲斐国出身で、天正10年武田家滅亡後に徳川家に仕えた。吉保は館林藩主綱吉の将軍就任とともに江戸城に入り、綱吉から松平姓を受けた。6代将軍就任直後に吉保は隠居し、男吉里が後を継ぎ甲斐の領国経営、甲府城修築に傾注した。しかし、享保9年(1724)に大和郡山に移封となり、その後当城は勤番支配となり、幕末の混乱の中、慶応2年(1866)に甲府城代が置かれて明治維新を迎えた。

明治以後は山梨県の近代化計画の中で、明治9年勸業試験場・同39年には1府9県勸業博覧会の開場となるなど殖産興業の中心的役割を担うとともに甲府城の遺構も次々に近代化と市街化の荒波に洗われた。明治30年代に城の北側に中央線の開設が決定され、大正末から昭和初年には内堀が埋め立てられて商店街に売却された。また楽屋曲輪内に県庁が移転した。昭和42年に山梨県文化財保護審議会の答申を受け、翌年県指定史跡となった。



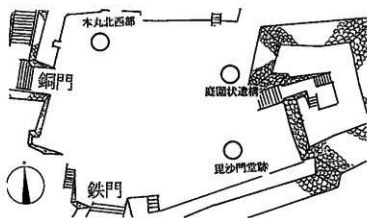
第9図 甲府城内屋作図(露木家蔵)

第2章 発掘調査

第1節 本丸

(1) 現状

本丸は甲府城の中央の最も高いところに位置し、東西70m、南北50mの台形を呈する曲輪で、面積は3000㎡である。東側には天守台石垣が接続し、周囲には高さ3m前後の腰石垣が巡る。入り口は南西に鉄門(くろがねもん)、西側中央に銅門(あかがねもん)がある。天守台と北側腰石垣の間には2層の本丸櫓が建てられていた。本丸中央には本丸御殿が、南東隅には毘沙門堂が鎮座していた。この毘沙門堂は、東西2間、南北3間半の長方形石垣の基壇上の北側に南に面して築かれた1間社流造であったと考えられる。



第10図 本丸調査位置図

(2) 毘沙門堂跡

初年度に行った地中レーダー探査によって、絵図に毘沙門堂が描かれている場所で、極めて強い反応があるとレポートが提出された。

本丸南東にあった毘沙門堂跡の調査は93年7月より8月までの2ヵ月間行った。調査前は南の腰石垣側には白樺・珊瑚樹などの常緑樹が繁茂しており、長い間擾乱を受けていない様子であった。

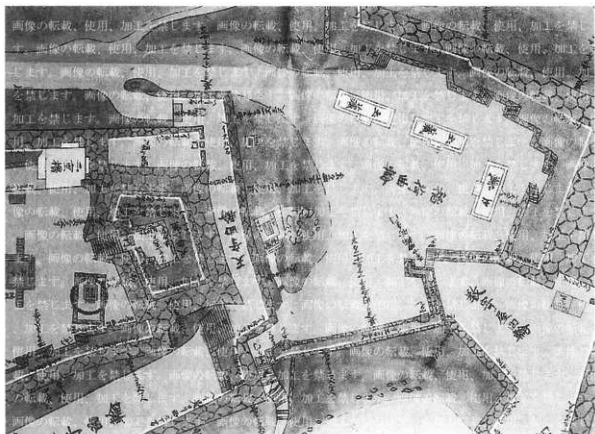
調査に際しては樹木の伐採および移植を行い、セクションベルトを十字に設定して、掘り下げた。表土はいわゆるピリと呼ばれる砂利が黄色粘質土中にめり込んだ状態で、極めて堅くしまっており、人力での剥ぎ取りは、ツルハシを用いる以外は不可能な状態であったため、表土を一部重機によって剥ぎ取り、その後に測量用の基準杭を設定した。基準杭は天守台に設定されている基準点から移動したもので、XYZの数値を有する。

検出された遺構は、腐りかけた柱が残る柱穴とそれを結ぶ土台木が方形に残る建物跡(東屋か作業小屋)と瓦やコークスを覆土中に含む土壌が3基である。

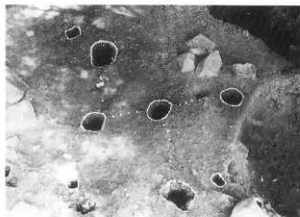
7号土壌は調査区の東南に位置する不成型の円を東西に二つ繋げた瓢箪状で、覆土中よりコークスや鉄屑及び花崗岩の破片が大量に出土した。東側の土壌は東西120cm、南北100cm、深さ60cmの隅丸方形に近い形状を呈する。西側の土壌は東西70cm、南北50cm、深さ54cmの隅丸方形の土壌である。この北西には東西24cm、南北28cm、深さ52cmの方形の柱穴が付属し、柱穴に隣接して3寸角の材木が東西に据えられている。建物の柱穴と土台木は調査区の南東側に集中しており、土台木の南北の間隔は3.1m、柱穴の間隔は南北3mである。土台木の東西への広がりには磨食のため正確には確認できないが、現存する規模は南側で1.2m、北側で2mである。柱穴の東西間隔は南側で0.8m、北側で0.65mを測る。柱穴を伴う遺構と土台木を伴う遺構には主軸方向に違いが認められ、覆土の違いから時間差もあるように考えられる。既に記したように7号土壌の覆土中に花崗岩の破片とコークスが大量に含まれていたが花崗岩はこの地山には存在せず、花崗岩を使用して造られた施設は、明治以後に造られた鉄門と銅門の階段及び天守台の階段、更には謝恩碑である。コークスは石材を加工するための工具の焼き入れに用いられるもので、それも明治以降である。これらのことから、7号土壌及び柱穴の性格は、大正年間に設置された

南西隅に聳える謝恩碑建設工事のための作業小屋のものと考えられる。

9号土壌は直径2～2.2mの円形を呈し、深さは平均30cmを測る。底の中央には摺鉢状の落ち込みが認められる。土壌の西側の壁付近には地山の安山岩が点在している。8号土壌は主軸を西側に振った長方形で、東西60cm、南北200cm、深さ30cmを測る。底や壁には地山の安山岩が点在しており、南西には灰を含んだ黒色土が覆上で、北西は別の新しい土壌によって切られている。この9号土壌も7号土壌同様な性格が想定される。その他に土壌は数基検出されたが、いずれも浅いもので覆土の様子や形状からも柱穴とは考えられない。調査区の北側半分には鉄筋コンクリートで造られた鉄塔の基礎が検出された。地中レーダー探査で強く反応したものはこの鉄塔基礎と考えられ、毘沙門堂に関係する遺構は検出できなかった。



第11図 楽只堂年録所収絵図（柳沢文庫蔵）



第12図 本丸毘沙門堂跡（柱穴）



第13図 本丸毘沙門堂跡

(3) 本丸南腰石垣

本丸南にある腰石垣は、天守台から真っすぐ西に伸び、鉄門の手前で約120度の角度で南に曲がっている。楽只堂年録の絵図には腰石垣上に設置されている塼の長さや曲輪側に造られた石段の段数、石垣の高さが記されているので、江戸時代中期の様子を知ることができる。この絵図によると東西の塼の長さは23間3尺5寸(42.45m)、南北の塼は2間2尺(4.2m)である。石垣には2ヶ所の相坂と西側角に石段があるが、東側の相坂は東石段8段、西石段は10段、西相坂の東石段は10段、西石段は7段、西角の石段は25段である。石垣の高さは8尺5寸(2.55m)である。また、腰石垣天端の幅は2間2尺(4.2m)である。角より西側では、本丸地盤が下がっていたと考えられるが、段差の数値は明らかではない。また、本丸南面石垣の天守曲輪からの高さは、3丈1尺(9.3m)、石垣根石が据えられている地盤(地山)と天守曲輪面との比高は6尺(1.8m)である。

南腰石垣の根石付近の調査は、昨年(2019年)の2月から着手した。この調査は根石が据えられている地盤の確認及び周辺での遺構確認を目的とした。調査着手時には、楓や珊瑚樹などの植え込みが多く、植栽とゴミ穴の攪乱は著しかったので、腰石垣に直行する南北方向のトレンチを10m間隔を基本として設定した。

腰石垣根石付近の地盤は安山岩を基岩とする地山で、この地山の露頭岩の上に根石を据えたり根石として石垣を積んでいることが確認された。トレンチ内部の地山傾斜方向は北傾斜を示している。地山は北側(本丸内部)に傾斜しており、腰石垣の根石付近が最も高くなっている。腰石垣より曲輪内側には瓦を大量に含む土壌と花崗岩の破片を含む土壌以外に明確な遺構を検出できなかった。腰石垣の中央より東側では、本丸内部から腰石垣をくぐる暗渠の入り口を検出した(3号暗渠)。この暗渠は「昭和40年代まで曲輪側は開いていたが、危険のため埋めた」と公園管理人からの聞き取りに基づいて調査を行った。また、腰石垣解体作業前の石垣番付け作業中に暗渠の出口を本丸南石垣中央より西側で確認した(4号暗渠)。この暗渠の入り口は、腰石垣根石調査では確認できず、石垣解体工事中に本丸事業面より1m以上高いレベルで、縦坑が検出された。このことから、この2号暗渠は本丸内部の水抜きのために設置されたものではなく、腰石垣天端の雨水対策のために設置されたものと考えられる。



第14図 甲府城内屋作図部分(露木家蔵)



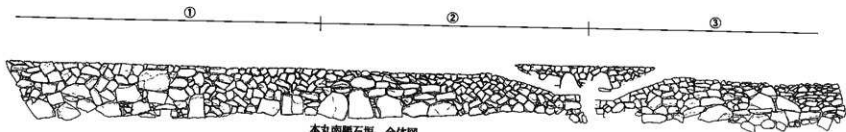
第15図 本丸南腰石垣調査前



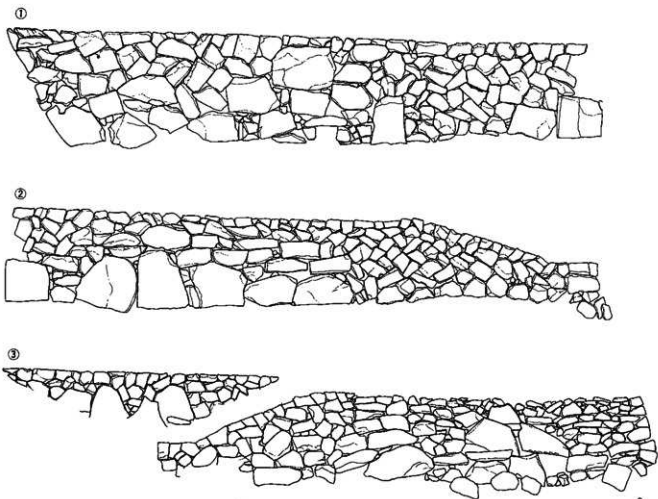
第16図 本丸南腰石垣天端調査風景



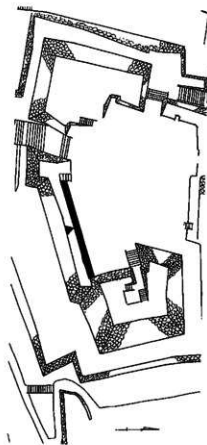
第17図 同上調査風景



本丸南塚石垣 全体図



第10圖 本丸南塚石垣立面圖



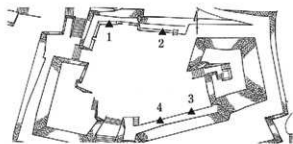
第10圖 本丸南塚石垣位置圖

(4) 本丸腰石垣の付属する水抜き暗渠

南腰石垣東側にある3号暗渠の規模は、入り口部分の高さは0.5m、横幅は0.5m、出口部分の高さは0.5m、横幅は0.5mを測る。奥行きは5.4~5.8m、入り口と出口のレベル差は0.3mを計り、水路の平均勾配は3.5°である。3号暗渠の西側30mに4号暗渠がある。発掘調査では入り口部分は検出できず、解体工事中に見発見されたため、入り口部分の規模は不明であるが、縦坑は0.6mの方形で深さは1.95m、横坑は高さ0.45m、横幅0.5m長さ3.7~4.2m、入り口と出口とのレベル差は0.3mを測り、平均勾配は5°である。

本丸北側にある腰石垣の調査では、東西2ヵ所の水抜き暗渠を検出した。東に位置する水抜き(2号暗渠)は、本丸櫓の西端の下に位置していたと考えられ、腰石垣の東端から西に10mの所に入り口を有している。この入り口部分は根石調査の時に確認された。根石より1石上に水落楯の痕跡を確認できた。入り口付近は瓦溜めにより攪乱され、西面の石組みのみであった。そのため、規模や構造は明らかではないが、暗渠の入り口には水落楯があり、水路によって集められた水がこの楯に落ち暗渠へと導かれる構造であることは推測できる。この楯の周囲からは築城当初に葺かれた瓦が大量に検出され、暗渠の内部はこれらの瓦と土で入り口部分は1m以上埋まった状態であった。このことは、比較的早い時期に、この暗渠が埋没していたことを示している。この水抜き暗渠より西に25m地点で、1号暗渠を検出した。この検出は、石垣解体工事に先立つ番付作業を実施していたところ、本丸北面石垣の天端より3.5m下がった場所に、暗渠の出口を見つけたため、本丸北西腰石垣の根石の地盤を天端石より2.2m掘り下げ、入り口を確認したものである。この暗渠の上にある本丸北西腰石垣は、江戸中期以後に積み替えられたもので、築城当初の石垣はこの暗渠の東側に根石がわずかに認められる程度である。この1号暗渠の入り口では、水落楯が完全な形で検出され、以後の復元工事に大いに参考となったが、楯に水を導く水路は攪乱により検出できず、その構造まで明らかにすることはできなかった。水落楯は東西0.4m、南北0.35mを測る方形で、深さは0.4mある。暗渠の入り口は高さ0.2m、幅0.4m、長さ5.6mを測る。この暗渠の内部は3号暗渠同様に瓦と土で埋まり、水抜き楯が埋められる以前に機能を失っていたものと考えられる。この暗渠は石垣解体工事で解体されるため、実測図面を作成するとともに石に番付を行い、復元作業の資料とした。

石垣復元工事に並行して4号暗渠の復元も行われた。石材の多くは再使用できたが、蓋石の一部及び出入口の袖石は取り替えられた。暗渠の床面は検出された通りの石張りとして張り石の間は粘性土を充填した。この工法は、既に掘石垣の改修工事によって検出された暗渠の復元工事や稲荷門東側で検出された暗渠の復元工事でも採用された手法であるが、今回の調査でも同様な工法で暗渠が構築されていたことを確認している。



第20図 本丸内水抜き位置図



第21図 水抜き暗渠1-1
(蓋石状況)



第22図 水抜き暗渠1-2



第23図 水抜き暗渠 1-3 (集水拱)



第24図 水抜き暗渠 2 (本丸側)

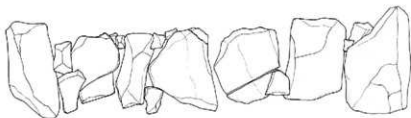


第25図 水抜き暗渠 3 (本丸側)

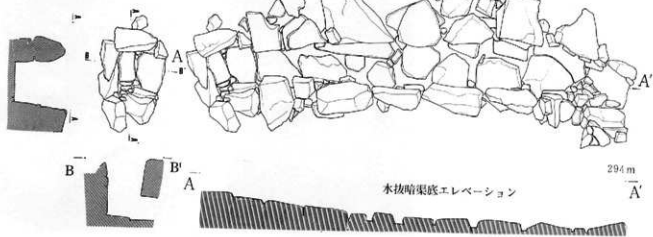


第26図 水抜き暗渠 4 (本丸側)

水抜暗渠溝蓋実測図



水抜暗渠実測図



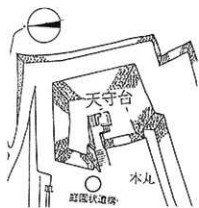
第27図 1号暗渠実測図

(5) 天守台西側下庭園状遺構

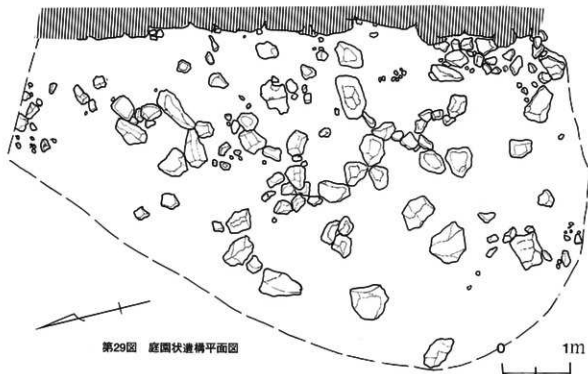
本丸東端に位置する天守台の北西側石垣の下に地山の岩が露頭した、東西7.5m、南北13mの台形状を呈する庭園状の遺構がある。遺構のある場所は、本丸御殿の東側に隣接し、御殿の上間より眺めたことを考えると、庭園として十分想定できる位置にある。また、本丸櫓台の石垣と天守台石垣が接続する部分でもあるので、既に消滅した本丸櫓台の石垣の根石を検出することも考えられるとして、天守台石垣改修工事に先立ち、この部分の発掘調査を実施した。

庭園の様に組まれた石の周囲を地山あるいは盛土上面を検出するために掘り下げたが、全面が地山であると確認された。この地山は、本丸南暖石垣根石付近で確認された礫石安山岩を母岩とする地山であり、庭石のように組まれたと見える石も、地山の岩であることが明らかとなった。中央よりやや南に三尊石とも考えられる石組(写真右側)があるが、これらも地山から立ち上がった露頭の岩であり、人為的なものではないと判断された。遺構面は西側に傾斜しているが、本丸櫓台石垣の根石と考えられる石は検出することができなかった。しかし、復元工事の際に現状を維持することは不可能と判断したため、写真測量を実施して、記録保存とした。

調査によって出土した遺物は瓦類がほとんどで、その他に若干の陶磁器はあるが、何れも近代の所産と考えられる。



第28図 庭園状遺構検出状況

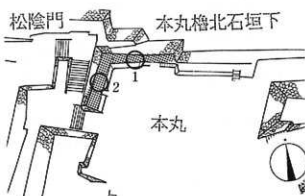


第29図 庭園状遺構平面図

(6) 本丸北石垣

ここで、本丸北石垣と呼ばれる石垣は、銅門の北に位置し、本丸北西部分を形成する石垣である。銅門の北に隣接し西側を面して積まれた石垣をNo2とし、この石垣に直行して北側を面して積まれた石垣をNo1とする。

No2は南北18m、高さ9mの石垣で、江戸中期以降に積み直されたものである。No1は東西22m、高さ9mの穴太積み石垣でNo2との出角部分の上部に、間知石による積み直しが認められる。また、石垣全面には間知石による押さえを施している。両石垣は孕みや石材の破損が著しく、危険と判断されたため、今回の改修工事の対象となった。

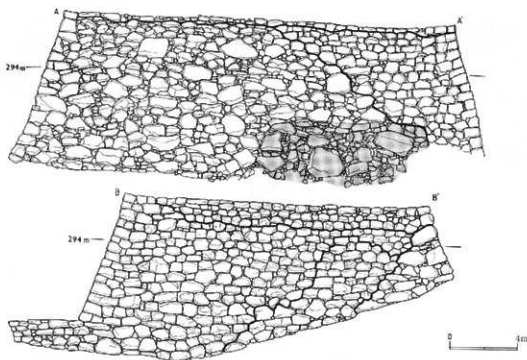


第30図 本丸北石垣位置図

これらの石垣の改修時期について、調査検討委員会の北垣氏よりNo2石垣は根石付近を残して江戸中期に積み直しされ、その後No1との出角の上部が倒壊したため、再度積み直されたもので、その時期は昭和初年頃であろうとの指摘を戴いた。この御助言により「城が機能している時期の改修はその技法を尊重する」との改修工事の基本方針に立ち、改修に採用される技法は、No2石垣は江戸中期、No1石垣は築城期とすることとなった。また石垣解体工事に伴う調査は、過去の事例に基づいて、石垣裏の盛土の掘削範囲の発掘調査、石材の番付けと計測、裏盛土の調査などを実施した。

掘削範囲にあたる本丸北西部分での発掘調査箇所には、江戸中期の絵図には享保12年に焼失した本丸御殿が描かれ、明治以降には噴水が設置されていたとある。調査直前までブロンズの母子像や水飲み場などの施設が赤松の植え込みの中に設置されていた。

絵図に記されている天守台石垣と本丸地業面とのレベル差、本丸と二ノ丸とのレベル差、さらには腰石垣の中に設置されている水抜き暗渠のレベルから判断できることは、本丸地業面が江戸時代より1m前後下がっていると考えられ、本丸御殿の礎石などが残されている可能性は極めて低い事が明らかとなった。



第31図 本丸北・西面石垣立面図

調査に着手後、表土から20cm下で本丸御殿、本丸櫓などに使用されていたと考えられる瓦を捨てた瓦溜めを検出した。ここからは大量の瓦が出土したが、特に浅野家の家紋である「遠い鷹の羽」、柳沢家の家紋を模した「花菱」の鬼瓦を検出した。この種の鬼瓦の出土は初めてであり、また、鯉瓦の鼻と上顎部分も検出した。

瓦溜めの下からは数百kgから2 t 程の巨石が数十石もある石溜めを確認した。これらの石は全て輝石安山岩で、地山の石壁から採集したものと推測でき、石の中には矢穴などの加工跡が見られるものもあるので、この石溜めは築城期に形成されたものと考えられる。土層は瓦溜めより下から石溜めまでが版築状の瓦層からなる盛土であることを確認した(第35図参照)。東西で見るとほぼ水平だが、南北で見ると北から南に向かって下がっている。なお、版築層では瓦を始めとする近世所産の遺物は検出できなかった。

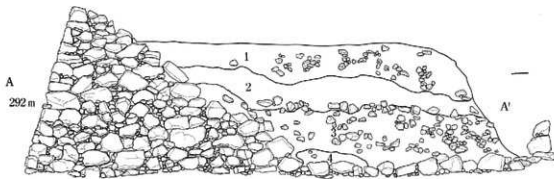


第32図 本丸北・西面石垣

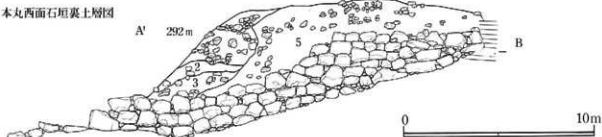


第33図 同左調査風景

本丸北面石垣裏土層図



本丸西面石垣裏土層図



1. 礎 層 1 二筋大前後の小礎がほとんどの割合を占める。礎間は砂質土である。石垣の裏築層と接している。
2. 明褐色土層 礎等はほとんど含まない固くしまった粘質土。
3. 礎 層 2 二筋大前後の大きな礎を多く含む。礎間は粘質土である。
4. 暗褐色土層 わずかに礎を含む非常に固くしまった粘質土。
5. 茶褐色土層 二筋大から二筋大前後の礎を含む砂質土。

第34図 本丸北・西面石垣裏土層図

(7) 石垣解体に伴う調査

石垣解体に伴い、本丸内側腰石垣の解体後において、根石及び裏栗層の調査を行った。また、その後外側の高石垣の解体後においても裏盛土及び根石調査を実施した。

腰石垣解体調査では、No 1 腰石垣の根石の下で五輪塔の火輪 1 点、その裏の栗石層からは石臼 6 点、空風輪 15 点、火輪 2 点、地輪 2 点（第104図No 1～16）が検出された。腰石垣の積み石の裏には、栗石を用いた小規模の石垣を見ることが出来た。これは、外側の高石垣が腰石垣より先に積まれていたことを示している。外側の高石垣の解体工事は、No 1 と No 2 石垣の出角より東側にある間知石垣の解体から着手された。この間知石垣の撤去後には、巨石を用いた穴太積みの石垣が現れたが、崩落寸前であり実測等の作業は不可能と判断される状況であった。この部分を含めて、根石列を残して解体を中止し、裏盛土及び根石調査を行った。その結果、No 2 石垣はすでに記したように、江戸中期以後に改修されたもので、瓦片や石の小片が多量に混入した裏盛土は、締め固めが不十分である。No 1 石垣は、築城期の穴太積みで、裏盛土は 4 層に大別できる。上部に位置する第 1 層は、拳大から人頭大の礫を中心とする栗石層、第 2 層は赤褐色を呈する粘質土層、第 3 層は 50cm 前後の礫層、第 4 層は根石が据えられる地山真上の締まった褐色粘質土層である。

この No 2 石垣裏盛土と本丸北西調査区で実施した土層観察（第34図）は、本丸北面では礫層と粘質土層による互層版築盛土で形成されていたが、No 2 石垣裏盛土には、このような版築技法の痕跡は確認できなかった。以上のことから江戸中期にはすでに石垣の裏盛土工法に版築技法を用いていなかったと言える。

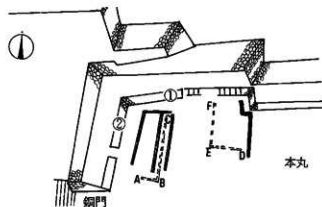
(8) 地中石垣

本丸北西調査区では地形面直下から南北に連なる石列を検出したため、調査区全体を 5～10cm 程度掘り下げ、石列を 4 本検出した。これらの石列に直行した形で、トレンチでは石垣の様相を示した。さらに石列の前面を掘り下げる調査中に 4 本の南北石垣に直行する東西石垣が 1 本、No 1 腰石垣根石より下部で新たに検出された。これら 5 本の地形面下部の地中より検出された石垣は明確な面を有することなく、石垣特有の裏栗石も確認できなかった。このことは本来地表に設置する目的で構築されたものではないことが考えられ、そのため本遺構を「地中石垣」と呼称することとした。このような遺構の検出は当域の調査でも初めてである。以下その特徴を要約する。

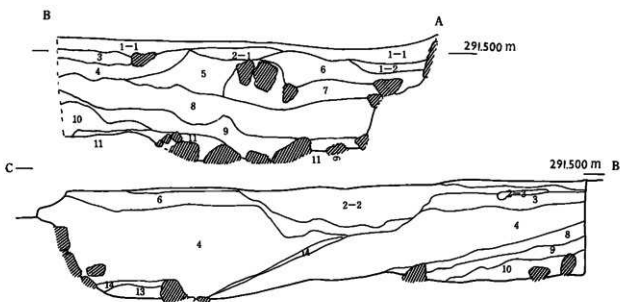
①地中石垣に使用されている石材は 1 m 以下のものが殆どである。②石材に加工痕は認められない。③積み方に法則性や明確な面が認められない。④勾配は垂直に近く、反りもない。⑤裏栗石層は存在しない。

以上のような特徴を有する地中石垣は、南北 4 本、東西 1 本と合計 5 本が検出され、南北に平行する 4 本相互の間隔は 1. 2. 4 番石垣は 2～3 m であるが、No 4 と No 5 の間隔は 12m と広く規則性は認められない。しかし、No 4 と No 5 の間には、石溜めと呼称した多量に石を入れた盛土部分がある。この石溜め部分の目的は、土砂の流動化を防ぐために大小多数の石を入れたのではないかと記したが、これと地中石垣の性格とは共通するものがあると考えられる。

さて No 1、No 2、No 4 と 3 本の間に施された盛土は、全面に堅く叩き締められている。地中石垣の前後では基本的な土層構成要素は大きく異ならないが、同一土層とは言えない。この盛土層は版築技法により施工されており、築城期に曲輪面造成及び外側高石垣と同時に構築されたものである。このことは地中石垣の根石が地山直上の版築盛土層上に据えられていることから言えよう。なお、盛土中からは瓦等の近世の遺物は検出されず、16 世紀に比定される土師質土器片や、宋銭（至元通宝）1 点が検出されている。



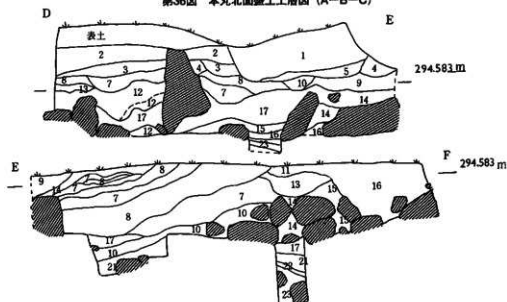
第35図 本丸北西・土層・地中石垣位置図



土層説明

- | | |
|----------------------------|---|
| 1-1 粘性が少なく小礫を含む明黄褐色土層 | 6 粘性が強く黄褐色土と黒褐色土が混在した黄褐色土層 |
| 1-2 1-1より礫が少ない締まった黄褐色土層 | 7 黄色のブロックを含む暗褐色土層 |
| 2-1 粘性が少なく砂質土を含む粘り強い明黄褐色土層 | 8 黄色粒子と小礫を多く含む粘りが強い暗褐色土層 |
| 2-2 凝灰岩の礫を含む赤褐色土層 | 9 8より締まるが粘性の少ない暗褐色土層 |
| 2-3 細かな礫を含む黄褐色土層 | 10 地山直上の粘性土（風化した表面が黄色の安山岩の間に混入する粘性締まりともに極めて強い暗褐色土層） |
| 3-1 粘土ブロックを含む粘性の強い暗褐色土層 | 11 地山（風化した安山岩の岩塊） |
| 3-2 礫は少なく堅く締まった明茶褐色土層 | 12 礫を含む粘りのある赤茶褐色土層 |
| 4 粒子が細かく風化した黄褐色の礫を含んだ暗褐色土層 | 13 礫を若干含む粘りのある暗茶褐色土層 |
| 5 4より礫が少なく締まりが強い暗褐色土層 | 14 細かな礫を含む黄褐色土層 |

第36図 本丸北面盛土土層図 (A-B-C)

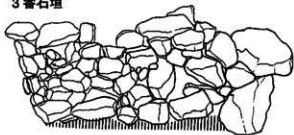


表土 芝の芽上

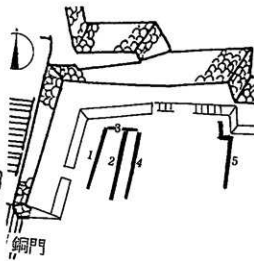
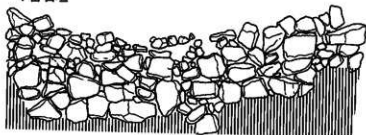
- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 赤松林域中の表土 | 11 安山岩 - 凝灰岩の小礫を含む明茶褐色土 |
| 2 礫と瓦を含む茶褐色土 | 12 細かな礫を含む茶褐色土 |
| 3 花崗岩 - 凝灰岩の小礫と瓦を含む旧表土 | 13 凝灰岩礫を含む固く締まった茶褐色土 |
| 4 礫を含む粘性のある茶褐色土 | 14 礫をほとんど含まない粘り強い固く締まった暗褐色土 |
| 5 細かな風化した灰岩凝灰岩粒子を含む砂質土 | 15 12より明るい茶褐色土 (12-2) |
| 6 固く締まった茶褐色粘質土 | 16 14より明るい茶褐色土 (14-2) |
| 7 安山岩 - 凝灰岩の小礫を含む茶褐色土 | 17 凝灰岩礫を含む固く締まった茶褐色土 (12-2層) |
| 8 少量の礫を含む締まった茶褐色土 | 21 細かな礫を含む締まった明茶褐色土 (地山) |
| 9 凝灰岩礫を含む粘り赤褐色土 | 22 21より明るい褐色土 (地山) |
| 10 礫を含む砂質茶褐色土 | 23 22より締まった赤褐色土 (地山) |

第37図 本丸北面盛土土層図 (D-E-F)

3 番石垣

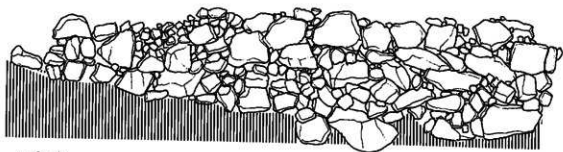


4 番石垣

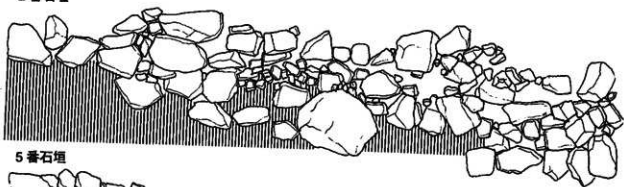


第38圖 本丸北西地中石垣位置圖

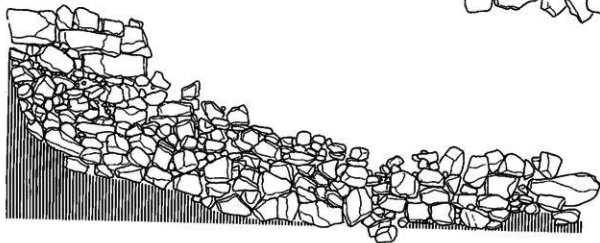
1 番石垣



2 番石垣



5 番石垣



第39圖 本丸北西地中石垣立面圖



地中石垣検出前



地中石垣全景（1～4）



作業風景



腰石垣と1番石垣



1番石垣計測風景



2番石垣



5番石垣



3番石垣

第40回 本丸北西地中石垣

第2節 鉄門・銅門・鍛冶曲輪門・坂下門周辺

(1) 現 状

① 鉄 門

鉄門（くろがねもん）は、本丸の南、謝恩碑の東側に位置し、天守曲輪から本丸への入り口にあたる。調査前より地表に露出している5つの礎石が確認できた。発掘調査は礎石の確認、柱間の計測、水路の検出等、門の全容の把握を目的として実施された。

② 銅 門

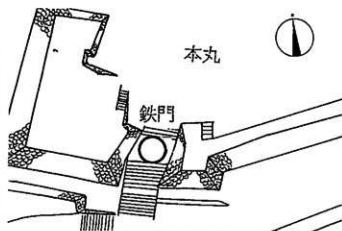
銅門（あかがねもん）は、本丸の北西、謝恩碑の北側に位置し、屋形曲輪から本丸への入り口にあたる。調査前より地表に露出している4つの礎石が確認できた。発掘調査は礎石の確認、柱間の計測、水路の検出等、門にかかわる全容の把握を目的として実施された。

③ 鍛冶曲輪門

鍛冶曲輪門は、鍛冶曲輪の西、県庁の東に位置し、大手門を経て、鍛冶曲輪への入り口にあたる。調査前はアスファルト舗装がされており、鉄門、銅門のような礎石は確認されていない。発掘調査は鍛冶曲輪門復元に向けてのデータ収集を目的として実施された。

④ 坂下門周辺

坂下門は、鍛冶曲輪から二の丸へ入る入り口にあたる。門跡は園路にあたるため、アスファルト舗装がされている。今回の調査は、坂下門の東側、中の門の南西部分で実施した。



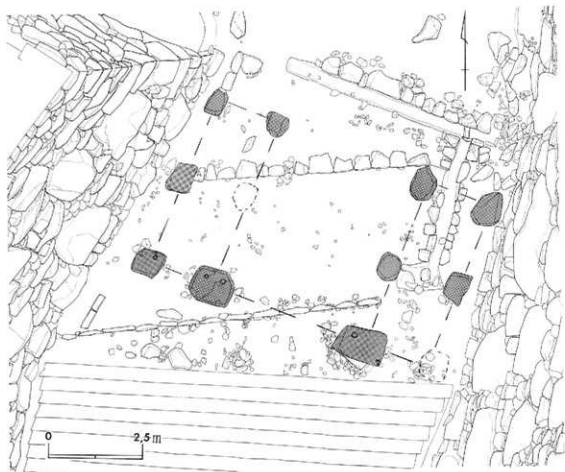
第41図 鉄門位置図

(2) 鉄 門

鉄門は本丸南西にある櫓門で、南下にある天守曲輪から本丸に入る正面の施設である。門左右の袖石垣中段には桁材を受けた穴が抉られている。東側袖石垣には縦25cm横20cmの長方形の穴が、西側には横20cmの断面L字状のあごがある。これから桁行きを計測すると13.5m（7間半）、梁行き4.5m（2間半）である。現在の石段は、門の桁方向より30度ほど振れている。

調査着手前には、正面の大扉を支える主柱の礎石3個とその控え柱の礎石2個が露出していた。調査によって検出された礎石は控え柱の礎石5個である。調査では中央の控え柱の礎石の1個が検出できず、礎石の下に設置された栗石を検出した。正面の礎石列は東西に4個が並び、柱間は東から1.8m、4.5m、1.8mである。大扉を受ける中央の2個の礎石と西端の礎石には軸吊り穴が掘られており、穴は東柱に1個、西柱に大扉と潜り戸用の2個、西端の礎石にも潜り戸用の1個である。中央控え柱の礎石も4個並んでいたと考えられるが、調査では西の大扉背後の礎石が確認できなかった。西端の潜り戸の柱間も東側と同様で1.8mを測る。礎石間には、明治以降の石段の石列が南北に2本確認された。この石段の石材は安山岩であるので、城の施設に使用されていた石材の再利用であると考えられる。

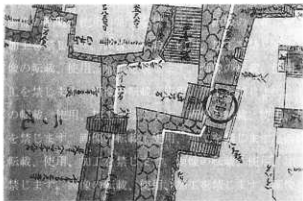
石組みの雨受け溝は、幅0.3cm長さ3.5mの規模で東側の礎石列の中間で確認され、北側の礎石列の1.2m北で西に直角に曲がり、5mまで検出された。溝の南側と西側は攪乱によって消滅しており、石を抜かれた痕跡も確認できなかったが、この攪乱は上述した明治以後の石段設置によるものであろう。溝の覆土は水性堆積物である砂を含んだ黒褐色土で、瓦と陶磁器が出土している。覆土の下には粘質の高い黄褐色土の地山が確認された。東西の雨受け溝の本丸側は一段上がって本丸地形面に至り、更になだらかになって本丸内部に続く。現在の表土の下には厚さ30～40cmの厚さに瓦や礎石などが混在している層がある。この層を除去すると本丸地形面が検出された。



第42図 鉄門平面図



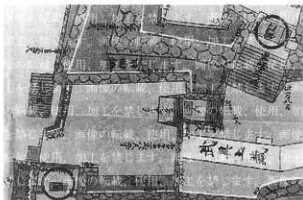
第43図 鉄門礎石



第45図 絵図に載る鉄門（柳沢文庫）



第44図 鉄門水路



第46図 絵図に載る鉄門・坂下門（同上）

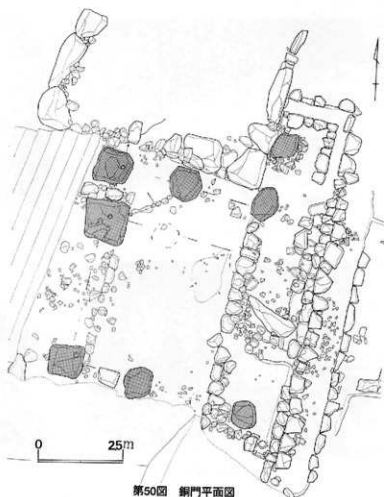
しかし、明治以後の攪乱、特に謝恩碑建設に伴う工事によるものが著しく、江戸時代の本丸地表面を面的に確認することは困難であった。

(3) 銅 門

銅門は、本丸西側の中央よりやや北に位置し、桁行き6m（5間半）、梁行き4.6m（2間半）の規模を有する櫓門である。調査着手前に確認された礎石は、扉前列の3石、控え中柱2石、控え柱2石の合計7石であった。礎石の石材では、扉前列の礎石は石材を矢で割り、必要な大きさに加工して、表面を整で成型しているが、控え柱の礎石は平な自然石をそのまま利用している。大扉の礎石間を、礎石の中央で計測すると4.2m、大扉の軸吊り間隔は3.7mである。2本の支柱の礎石中央には方2寸、深さ2寸のタボ穴と径6cm位の扉の軸擦り穴がある。大扉の北側には両開きの潜り戸があったことが2個の軸吊り穴から確認できる。

今回の調査では、曲輪側で石組雨受け溝が礎石の左右に検出された。この溝の位置から門の桁方向の軒の長さは12m、梁方向の軒の長さは6mであり、南北にある腰石垣の上にそれぞれ桁がのる形態であった。また、北側の礎石列より1.8m外側で溝より内側に控え柱の礎石が1個検出された。このことから門の桁行きは5間（9m）、梁行は3間（5.4m）の規模であることが明らかである。溝は腰石垣の角から北1.5mの位置で幅0.4m深さ0.3mを測り、東に1.5m伸びて直角に南に曲がるが、検出できた溝は南に1.8mである。また、門南側の腰石垣側でも、北側と同様な溝と控え柱が検出されている。

銅門の本丸側の軒を出ると、石組み溝を越えて、1段の石段を登ると本丸地表面に至る。絵図に描かれているこの付近の様子は次の通りである。銅門から外側（西側）には石段で帯曲輪の北側によって平場に降り、柵門を出て石段を北に下る。更に西に曲がって内松陰門をくぐって石段を下り二の丸の北にある山の井門と松陰門の間に出る。南に進むと山の井門に入って二の丸に入り、西に進むと外松陰門を経て石段を下って屋形曲輪に至る。絵図に描かれている柵門の柱穴及び石段の調査については、帯曲輪石垣工事に伴って来年度以降に実施する予定である。



(4) 鍛冶曲輪門

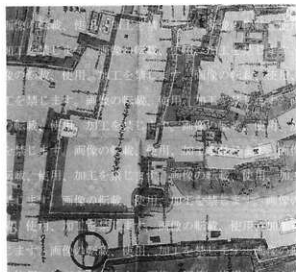
鍛冶曲輪門は、薬屋曲輪から鍛冶曲輪へ入る門で、鍛冶曲輪の西端に位置する。東西4m、南北5mの範囲では礎石が抜かれた跡を1ヶ所確認した。門跡は、公園の西側からの入り口ということもあり、公園内の建物へ供給されるガス管、水道管、電話線など4本の地下埋設物が布設されていた。さらにアスファルト舗装のための砕石、砂等で著しく攪乱を受けていた。江戸期の地形面は、この攪乱層の直下にあたり黄色の粘性土となっている。この地形面は表土から約20cm下で確認した。この面で礎石の抜かれた跡を南西の隅で1ヶ所確認した。礎石の抜かれた跡には拳大の石が半円状に並べられており、その直径はおよそ30cmほどであった。門にあるべき施設としての雨受けの側溝、石段等は、地盤の掘り下げが行なわれていたため、確認できなかった。鍛冶曲輪門は絵図には四脚門として表記されており、柱は中央の2本、前後に袖柱が各2本、計6本、あるいはくぐり戸を片側に1ヶ所もつ形状から9本になる。本調査で確認した礎石の抜け跡の位置から、鍛冶曲輪門は後者のタイプになり、復元にむけたデータとして採用された。



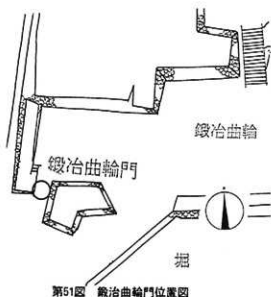
第52図 鍛冶曲輪門跡



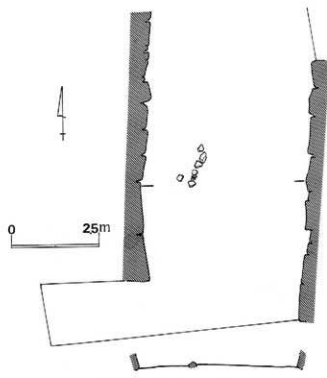
第53図 埋設物検出状況



第54図 絵図に載る鍛冶曲輪門 (柳沢文庫蔵)



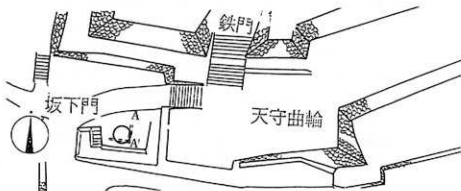
第51図 鍛冶曲輪門位置図



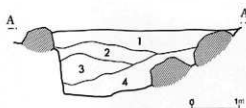
第55図 鍛冶曲輪門平面図

(5) 坂下門周辺

坂下門は、鍛冶曲輪から二の丸への入り口にあたる。さらに中の門を経て天守曲輪に至る通路でもある。今回の調査は、坂下門の東側に位置する南北7m、東西10mの範囲で実施した。表土から30cm下で調査区全域に亘り瓦層を検出した。瓦層は15~30cmの厚さの層をなしており、その直下から江戸期の地形面を検出した。瓦層は、椀瓦をほとんど含まず、本瓦中心であったことから、ある時期の一括廃棄と見なすことができる。間知石を使用した腰石垣に沿って、江戸期の地形面の直下で、東西に並ぶ石列を検出した。この石は、1辺がほぼ80~90cmである。石は加工痕が見られず、自然石である。現況腰石垣の位置は、絵図によると土手(土塁)となっており、これらの石は土手(土塁)の土止めであったと考えられる。また、調査区内のトレンチで赤味を帯びた凝灰岩を含む地山を確認した。地山は北から南に向かって落ち込んでいる。

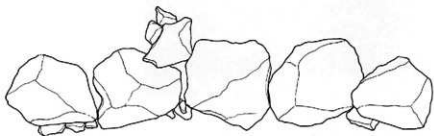


第56図 坂下門周辺位置図



- 1 腰石含む(白土質・凝灰質)しまりのある黄赤褐色土。
- 2 凝灰岩が多く含むとみられてしまりのある暗赤褐色土。(腰石は小さい)
- 3 凝灰岩・灰土質が多く含む。(こぶし入りのものが多い)腰が多く含まれるため、ややしまりのない暗赤褐色土。
- 4 陶器に近い質。骨の量が多い。腰は凝灰岩であり、腰が多いためにしまりがなく赤褐色土。
- ※ 1~4共に瓦を含まず。
- ※ 坂下門に向かう石列は空の脚の上のっている。
- ※ 4の層では、北側に残る2石の他、大きな3石を確認。

第57図 土層図



第58図 石列平面図



第59図 瓦 溝

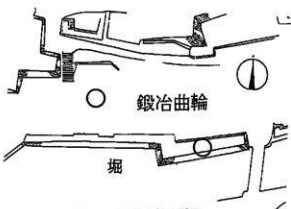


第60図 石 列

第3節 鍛冶曲輪

(1) 現 状

鍛冶曲輪は甲府城の南側の堀に面したところに位置し、天守曲輪より1段下がった所にある。城が機能していた頃は、米蔵・勘定所などが確認できる。廃城後の曲輪跡には、勲業試験場・米軍兵舎・山梨県庁別館などが次々と建てられていった。舞鶴城公園として開放されてからは、自由広場・噴水・花時計などが設けられた。



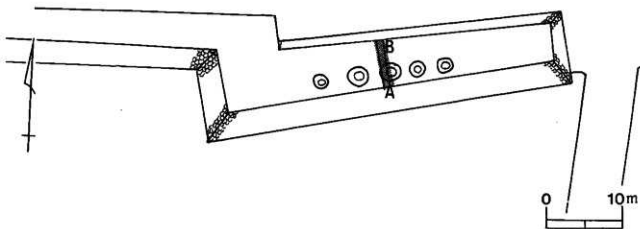
第61図 鍛冶曲輪位置図

(2) 鍛冶曲輪南腰石垣

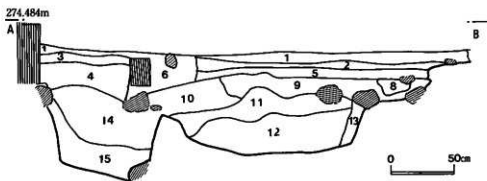
現況の腰石垣は遊亀橋を挟んで東西に155mの長さを有する。そのうち、今までの工事によって120mあまりの、改修が済んでいる。今回は、改修をしていない30mの範囲で調査を実施した。この石垣は遊亀橋の西側、公園管理事務所の裏側に当り、天端は、公園のために桜・低木の植え込みが数多くあり、それらの間にトレンチを4ヵ所設定した。いずれのトレンチでも掘り下げていくと大量の瓦が出土した。表土から4層下で柱穴の掘り込み面を確認した。この柱穴は、腰石垣天端巾の中央よりも堀側に位置し、東西に3m間隔で5ヵ所確認した。また、これらの柱穴からは大量の瓦（土のう袋20袋分）が出土した。これらの瓦は棧瓦や雲母（キラ）粉を表面に確認できるなど、比較的新しい時期のものと思われるため、柱穴は棧瓦を使用していた堺のものであろう。

(3) 鍛冶曲輪西側（花時計跡）

鍛冶曲輪の西側半分は、恩賜林記念館・花時計・松林などがあり、今回の調査では、花時計跡さらにその北側を中心に実施した。1辺5mのグリッドを12ヵ所に設定した。表土から30cm下げた所でコンクリートの基礎を検出した。コンクリートの基礎は調査区全体にわたっており、県庁別館のものである。江戸期の地形面はこれらコンクリートの基礎の直下で確認することができた。ただこの地形面は、調査区の中央を東西に伸びる帯状の部分のみで、その南北では様相が変わっている。東西に伸びる地形面は、その直上に瓦片が帯状に敷かれていた。また、この地形面を断面で見るとマウンド状になっていた。この面で金箔鍍瓦片1点、金箔鬼瓦片1点を検出した。B-1区（第64図参照）ではこの地形面を南北に切る長さで6.7mの石組みの水路を検出した。この水路は、両側が1～2段の間知石で組まれており、底にも石が敷かれていた。底の石はマウンド状の地形面よりさらに南側に伸び、この水路からは常滑の壺の口縁部1点を検出した。地形面の南側は、赤・青味を帯びた凝灰岩を含む無遺物層がマウンド状の地形面に沿うように東西に伸びる。北側は黄色い凝灰岩の礫層をコンクリート基礎の直下で検出した。その礫層の下からは、水分を多く含む粘性の強い黒色土層をA区全面にわたって確認した。この黒色土層からは、A-1区で馬の骨2点、A-2区でかわらけ1点、木製碗1点を検出した。さらに、この黒色土層からは、杉の木材、枕列を多数検出した。黒色土層はA-1区で最も深く、表土から4m堆積しており、東に向かって浅くなる。以上のように、花時計跡では、北側が池あるいは湿地のような状況で、その南側にマウンド状の土手が東西に伸び、その南側は、一段下がっている。また、石組の水路の底は、黒色土層上部に位置することから、黒色土層の池状遺構からオーバーフローした水を堀へ流す機能を果たしていたと推測できる。平成2～3年に実施したVLF探査の結果でもこの花時計跡は、地山の岩盤からの堆積層が最深部で5～10mあることがわかっている。今回の調査で検出した黒色土層と、位置は合致していた。柳沢期の絵図を見ると花時計跡一帯には建物、池状遺構などは描かれておらず、出土遺物や遺構の特徴から今回検出した池状遺構、マウンド状土手、石組水路は、江戸時代後半～幕末にかけてのものとして推測できる。

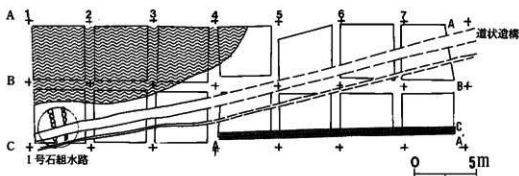


第62図 南康石室平面図

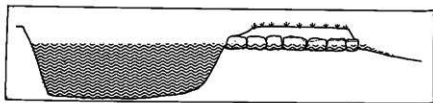


- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗茶褐色の粘性のある黄土</p> <p>2. 上部に白色の砂層が見られる粘性しまり共に弱い暗灰褐色土層</p> <p>3. 粘性しまり弱い暗茶褐色土層</p> <p>4. 粘性しまりやや弱い小礫瓦片を含む茶褐色土層</p> <p>5. 粘性しまりやや弱い小さい瓦片を含む暗灰褐色土層</p> <p>6. 覆瓦（コンクリート）</p> <p>7. 覆瓦（コンクリート）</p> <p>8. 覆瓦（塩ビ管）</p> | <p>9. 粘性やや弱く5に比べしまった茶褐色土層</p> <p>10. 9に比べしまり弱く全体に黒味を帯びる暗茶褐色土層</p> <p>11. 10に類似、10に比べ粒子が細かい暗茶褐色土層</p> <p>12. 瓦層</p> <p>13. 10、11に比べ赤味を帯びる。粘性しまりやや強い暗茶褐色土層</p> <p>14. 粘性しまりやや強くわずかに瓦片を含む茶褐色土層</p> <p>15. 瓦を大量に含む粘性しまり弱い黒褐色土層</p> |
|---|--|

第63図 南康石室南北土層断面図

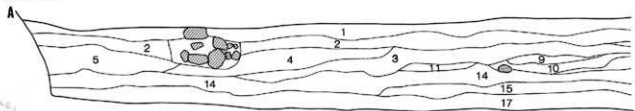


第64図 鎌治曲輪西側全体図

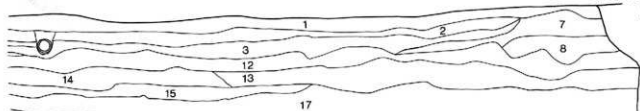


第65図 同上想定図（南北断面）

272.776m



272.776m

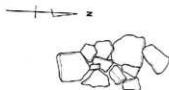
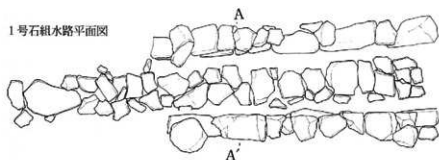


0 2m

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1. 砂りを含む粘性が強い赤土 | 10. 黄色味を帯びた粘性の強い黄褐色土層 |
| 2. 砂り・小礫を含むしまりのある暗茶褐色土層 | 11. 黄色味を強く帯びる固くしまった黄褐色土層 |
| 3. やや黄色味を帯びる固くしまった黄褐色土層 | 12. 小礫を含み黄色味を帯びる固くしまった暗褐色土層 |
| 4. 礫を多く含むしまりのある暗黄褐色土層 | 13. 礫を多く含み黄色味を帯びる固くしまった暗茶褐色土層 |
| 5. 黄色味を帯びるしまりのある黄褐色土層 | 14. 小礫を多く含み黄色味が少ない暗褐色土層 |
| 6. 砂りを多く含む褐色土層 | 15. 礫を多く含む固くしまった暗黄褐色土層 |
| 7. 小礫を多く含む固くしまった暗褐色土層 | 16. 赤味をおびる暗赤褐色土層 |
| 8. 小礫を含む固くしまった暗褐色土層 | 17. 礫を多く含む固くしまった暗褐色土層 |
| 9. やや黄色味を帯びる暗褐色土層 | |

第66図 兼治曲輪花時計跡 B-4~7区 南側面セクション図

1号石組水路平面図



0 1m



1号石組水路断面図



1号石組水路調査風景



1号石組水路

第67図 1号石組水路



第68図 南腰石垣上柱穴及び瓦溜土層



第69図 同左柱穴及び土層



第70図 道状遺構



第71図 花時計跡調査区全景



第72図 鍛冶曲輪西築城期盛土層



第73図 鍛冶曲輪西跡南面土層



第74図 鍛冶曲輪西跡調査風景

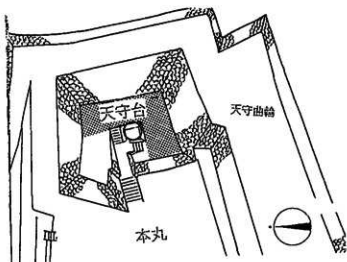


第75図 鍛冶曲輪西跡調査風景

第4節 天 守 台

本丸東側に接続している北西に突出部がある台形状の石垣が天守台である。この石垣の天端の長さとは北辺は17.8m、東辺22m、南辺17.5m、西辺20.5m、突出部は南辺4.5m、西辺8.5mを測る。つまり、本城の天守台の天端での面積は $(22+28.5) \times 16.3 \div 2 + 8 \times 4.5 \div 2$ と440平方mとなる。石垣根石の延長は約145mを測り、敷地面積は約1,300㎡となる。石垣の勾配では北側が、南面よりきつく、石材は北面で比較的転石が多く、南面は割石も見られる。また西面も割石が多い。

絵図に記されている様子は、天守台南面石垣（天守曲輪側）の高さは4丈5尺（13.8m）、本丸側では中央の石段の南側で、本丸からの高さは現状で8.3mを測るが、柳沢文庫所蔵の絵図では2丈3尺5寸（7.05m）と記されている。北側の人質曲輪門付近との比高差は13mを測る。



第76図 天守台位置図

本丸から穴蔵までの高さは3.6m、入り口の幅は石垣天端で5.34m、下端では3.5m、入り口の南側に張り出した石垣の天端幅は3mを測る。穴蔵の大きさは東西7.5m、南北9.5m、深さ3mを測る長方形を呈しているが、南西隅に穴蔵から石垣天端に昇る階段が取り付けいていたのであろう2.2m四方の張り出しがある。

天守台とその周辺を含む調査は、93年度より2年間で行うこととした。93年度は天守台南石垣下の根石確認と本丸側の石垣根石確認及び天端北側半分の調査を、94年度には天守台天端南側半分の調査を計画した。

92年度末に天守台南面石垣下にあった蛇笏の碑の撤去が終了したので、93年4月から碑跡の調査から着手した。その後同年7月から9月まで天守台天端の北側半分の調査した。また、94年度には天端の南側の調査を行い、計画通り終了した。

93年度調査経過

天守台南面石垣根石周辺の調査は、飯田蛇笏の句碑があった場所を中心にトレンチを南北に4本設定して調査に入った。調査範囲のほとんどが句碑移転工事の残石とコンクリート破片が散乱しており人力での表土剥ぎは困難と判断したため、ミニコンボにより表土の除去を行った。表土剥ぎ作業終了後に4本のトレンチを設定し、数寄屋曲輪調査を優先するため中断した。5月15日に再開し、黒色土層を人力で掘り下げると、ゴミ穴を検出した。覆土中からは瓦や空き缶が出土した。ゴミ穴以外は地山の岩盤にあたり岩盤は水平節理方向にN-70-Eと西南西から東北東に走り、垂直方向では北側に斜めに沈み込んでいた。出土した瓦は、築城期に潮るものは検出できなかったが、天守台石垣が地山の岩盤の上に根石を据えていたことを確認した。この様子は既に初年度に東面石垣根石調査で確認した状況と同様である。

本丸東側・天守台西面石垣根石調査は、本丸毘沙門堂跡調査と並行して6月から着手した。根石付近は周囲より数10cm高くなっていたため、石垣全面盛土とも思われたが、トレンチ調査でゴミを埋めたために周囲より高くなっていたのであり、既に前面盛土は削られていたことが判明した。またこの調査では、根石は現状地盤より1.5m下に確認されたが、石垣南半分は盛土上に根石を据えていることも明らかとなった。つまり、地山は天守台中央から鉄門中央に向かって西南西に伸びているのである。この方向は天守台南面石垣根石調査で確認した地山方向N-20-Wと一致する。

天守台天端調査は7月17日より着手した。調査予定地は天守台の北側半分であるが、南側は一般に開放しているため、調査区を防護フェンスで囲み、東西5.5m、南北16mの範囲を東西に2分割して、西側より人力による表土剥ぎを行った。排土は東側半分に置き、コンクリートの花壇の縁石やコンクリート製ベンチなどは外に撤去しながら礎石および遺物の検出に努めた。表土はピリ砂と粘質土が混在して非常に堅く、作業は困難を極めたが、一部削岩機の使用によって20cm程の堅い部分の除去を完了した。

調査中に排出される残土は、東側の掘り残している部分に一時置き、埋め戻しに使う三和土をクレーンで搬入するときに搬出する計画を立てた。残土には玉石やコンクリートなど土以外のものが大量に含まれているので、その分別も行った。

調査終了後の埋め戻しには、栗石層上面に小石を敷き、粘性土を敷きだす地盤を整地した。その上に粘性土を厚さ20～25cm敷きだし、プレートによって転圧を加える作業を3回繰り返して、埋め戻しを完了した。転圧した粘性土の上面には砂を撒いて、転圧プレートの粘性土が付着して転圧能力が低下するのを防いだ。この砂は、所謂版築層に一般的に見られる砂層と目的は同じものである。

調査結果について

調査区は北西側から時計回りで1区～4区として調査を行った。中央南東隅にある東屋部分は5区として、撤去後に調査した。

1区の調査 1区では表土除去後に、天端に敷かれた粘性土を部分的に確認したが、コンクリートベンチと植栽による攪乱が著しく、粘性土を面的に把握することはできなかった。この粘性土が敷かれている底の面まで攪乱及び粘性土を除去したところ、全面が栗石層となり、天端石及びその下の石の石尻を確認できるまで一部栗石層を除去しながら掘り下げた。北側中央部では以前に街灯用電柱が立てられていたと考えられる大きな穴を検出した。この周囲からは大量の瓦が出土しており、柱を立てる時に、栗石と瓦を穴に入れたものであろう。また、この北側には古い矢穴を有する方形の石が検出された。この石は、矢によって方形に成形されたもので、礎石に使用されたものであろう。これ以外に礎石と考えられる石は検出できなかった。(第81図)

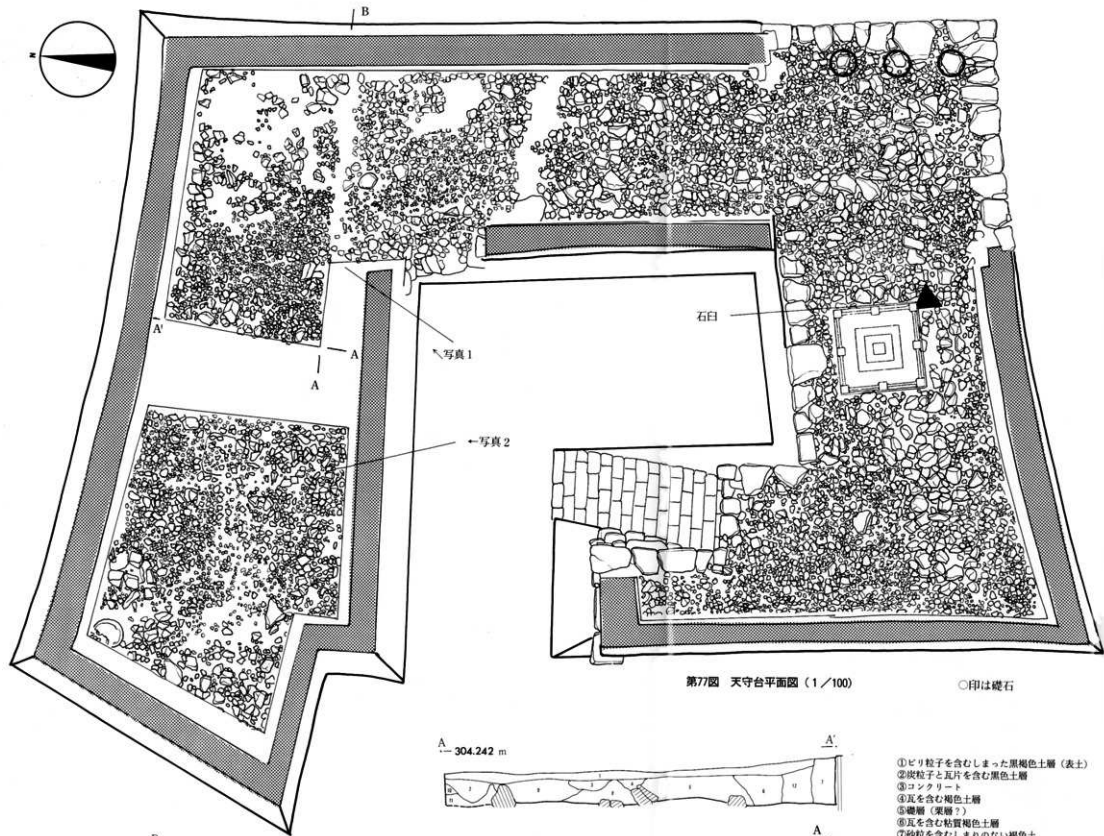
2区の調査 1区の東側に隣接する2区では、1区同様に表土を除去して土層を確認しながら、全面が栗石層まで掘り下げた。栗石層の直上では、締まった赤褐色粘質土が確認でき、この土層中には瓦は含まれていない。部分的にはベンチやコンクリート擬木の基礎として打たれたコンクリートがこの粘質土の下まで達している所が認められた。出土遺物の多くが天守台周囲に設置されていた塀に使用されていた瓦であったと考えられる。

3区の調査 2区の南に隣接する南北に長い区域を3区とした。この調査区の南は、天守台南東隅に建てられている東屋までとして表土を除去して掘り下げたが、状況は1区・2区と同様であった。

4区の調査 東屋の西側を4区として調査を行った。天守台南西隅部分では、レンガや瓦、硝子瓶などを大量に埋めたゴミ穴を確認したので、この穴を掘り下げ、栗石層の下部調査を行った。この攪乱穴が造られたのは昭和20年前後と新しく、戦争中の陶器破片も出土している。また、穀臼の下部も1点検出された。

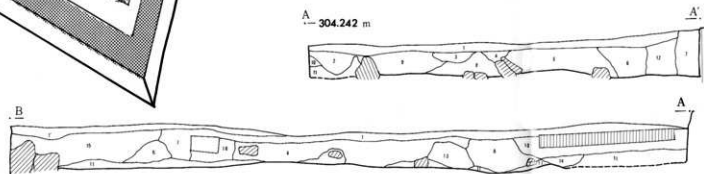
5区 東屋の跡地を5区として、調査を行った。この東屋は比較的早く建設されたので、その土台下は保存状態が良好と考えられた。土台のコンクリートを除去したところ、中央部分には穴が確認された。この穴は直径が20～30cmで深さは、2mを越え、底まで確認はできなかったが、電柱などを設置したのと考えられる。周辺からは大量な瓦片が出土した。また、石垣縁辺部では、南と東でL字状に礎石が検出されたり、礎石間隔は1.8m前後であるが、塀あるいは明治ごろの東屋の礎石と推測される。

以上のように、天守台天端調査では天守閣に直接結び付く成果を上げることができなかったが、その原因は後世の攪乱が著しかったことによるものと考えられる。



第77図 天守台平面図 (1/100)

○印は礎石



第78図 天守台土層図 (1/40)

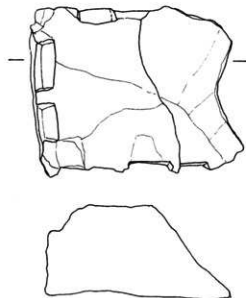
- ①ピリ粒子を含むしまった黒褐色土層 (表土)
- ②炭粒子と瓦片を含む黒色土層
- ③コンクリート
- ④瓦を含む褐色土層
- ⑤礎石 (表層?)
- ⑥瓦を含む粘質褐色土層
- ⑦砂粒を含むしまりのない褐色土
- ⑧粘質のあるしまった褐色土層
- ⑨瓦層
- ⑩しまりのない褐色土層
- ⑪しまりのある黄褐色土層
- ⑫粘質のある黄褐色土層
- ⑬しまりと粘質のある黄褐色土層
- ⑭粘質のある褐色土層
- ⑮砂層 (給水の跡)



第79図 北東隅築石層上面 (写真1)



第80図 北西隅表土直下礎石検出状況 (写真2)



第81図 礎石実測図 (1/10)

第3章 石材調査

第1節 調査の概要

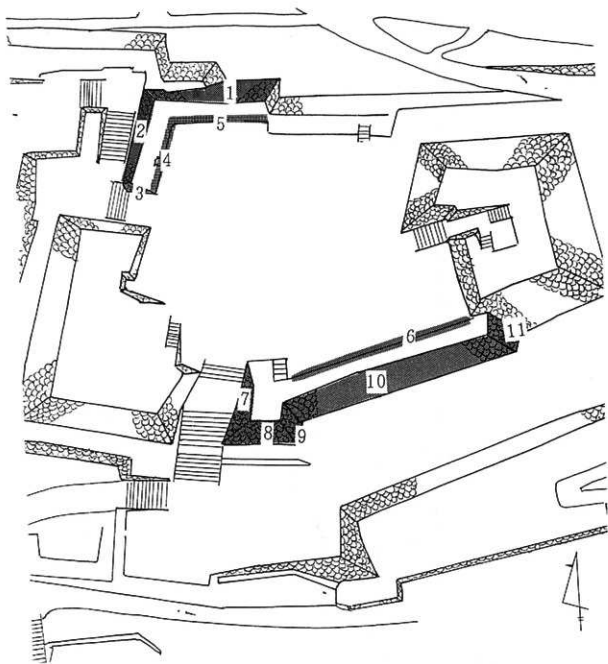
甲府城の石材調査は、調査初年度から実施されており、今年度の調査対象箇所は、解体工事が行なわれた本丸北石垣・本丸北腰石垣・本丸南腰石垣の3カ所である。調査における目的は、石積技術の解明にあり、具体的には甲府城石垣の特色でもある穴太積み技術の解明にある。穴太積み石垣の特徴はすでいくつか挙げられている。

- ① 自然石あるいは粗割石をほとんど加工せずに積み石として使用する。
- ② 積み石の石尻を極端に下げずに、控えを大きくとる。
- ③ 巨石を随所に配し、数石の高さで布積みが見られる。
- ④ 角石には算木積みが明確に見られない。 (『甲府城跡Ⅰ』より)

上記の①③④については、石垣表面の観察で確認できるが、②については解体工事を待たねばならず、また控えの大きさをデータとして残すために、数字に表した。調査方法は、解体前の石垣面で詰め石を除いた石に番号を付ける。この際、ある程度の耐用性を持たせるために、油性のマーカーを使用する。(番付調査)以後、この番号を基にコンベックス等を使用して計測を行なう。(計測調査)解体時には、石をクレーンで一つ一つ外し、その時に石の面の縦、横、控え、矢穴の有無(矢穴がある場合は、その大きさも計測)を計測する。また、クレーンのデジタルメーターで石の重量を計測する。これらの計測数値を石垣実測図や表に記し、穴太積みの特徴である②さらには③について検証していく。

ただし、この石材調査には問題点も挙げられる。第1に、計測調査時に極めて高い危険を伴う点である。解体工事と並行調査となるため、工事現場で行う。安全を確保するため、工事サイドとの打ち合わせを行なうが、それでも計測を実施する人間には細心の注意力が要求される。第2に、計測に適した条件を得るのが困難である点である。工事現場は、公園内にあるため、その作業ヤードは極力小さく設定される。そのため、解体された石は、一定の高さに山積みされるので計測しようとする石が見えない時もある。また、番号も消えてしまうことも多々ある。このため、番付調査時の通し番号の総数と計測の実数が異なってくる。第3に、重量計測時に、クレーンのデジタルメーターに誤差が生じる点である。石材は100kg～2tの範囲のものが大半を占めるが、メーターの性能上、100～300kgの石材については正確な数値で表すことはできない。また石材が風化のため、割れている時は計測不可能となってしまう。

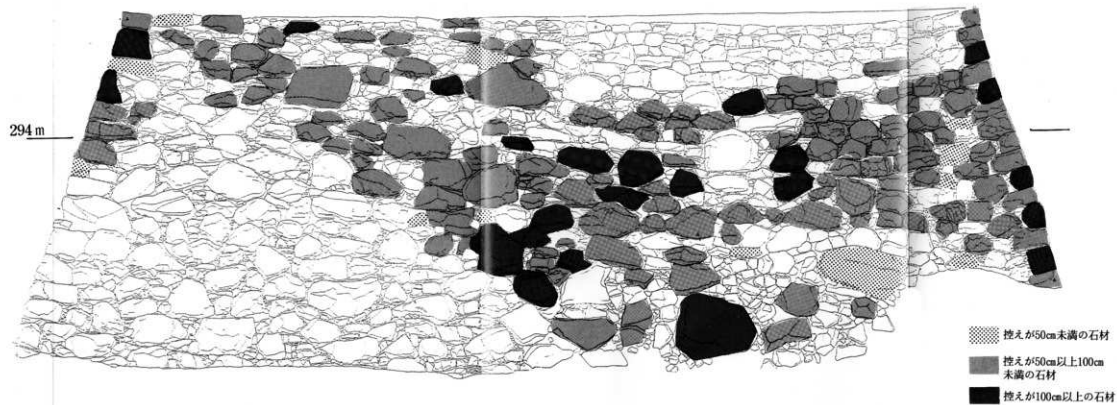
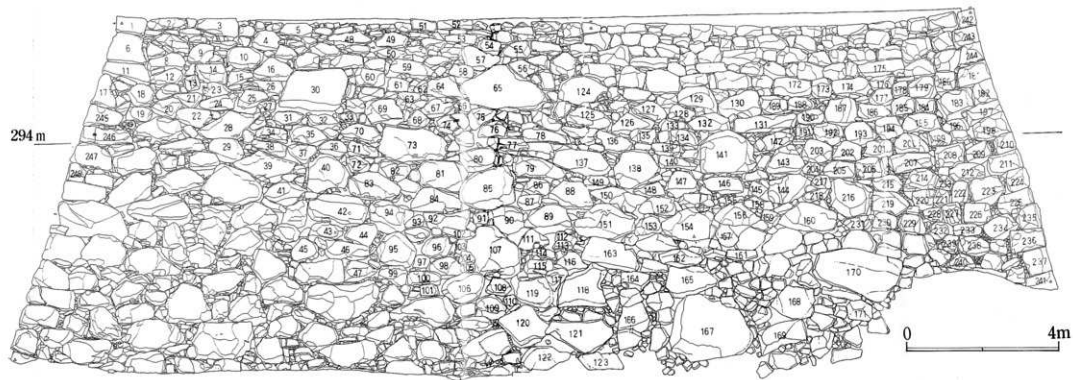
これらいくつかの問題点を含んではいるものの、現状ではこうした石材調査は必要である。今回実施した本丸北石垣・本丸北腰石垣・本丸南腰石垣でも控えの大きい石を配する穴太積みの特徴が明らかになった。また、工事と並行して行なうことから、工事サイドも石垣修復が文化財修復であることの認識を持つことが必要である。



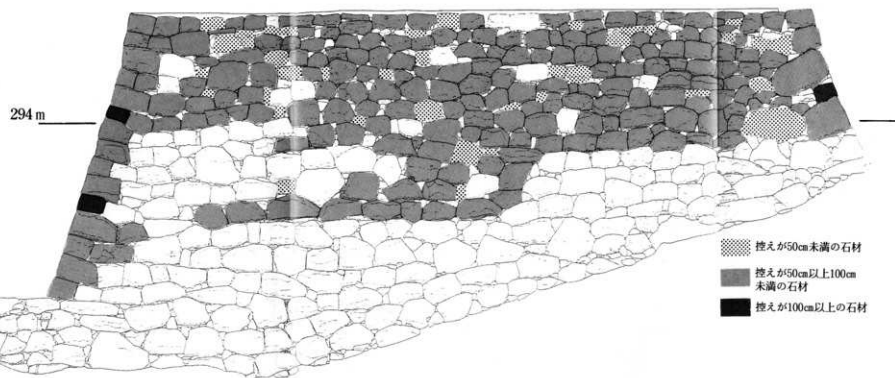
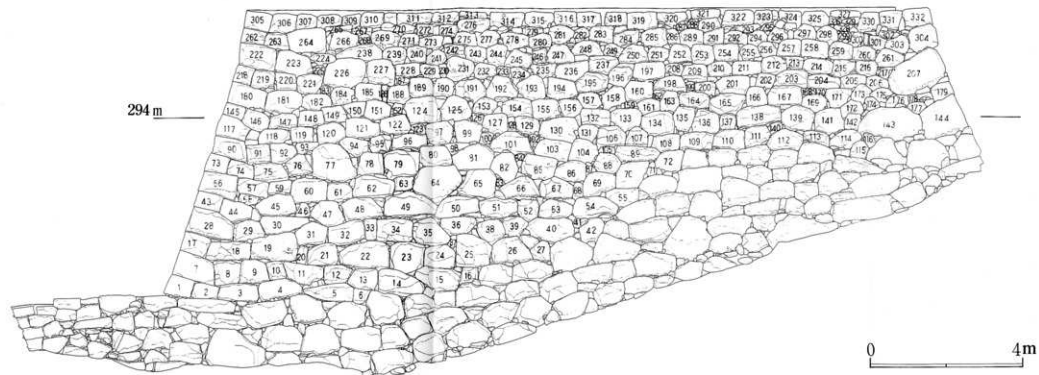
- No 1 本丸北面石垣
- No 2 本丸西面石垣
- No 3 銅門石垣
- No 4 本丸北腰石垣
- No 5 本丸北腰石垣
- No 6 本丸南腰石垣

- No 7 鉄門南石垣
- No 8 本丸南石垣
- No 9 本丸南石垣
- No 10 本丸南石垣
- No 11 本丸南石垣

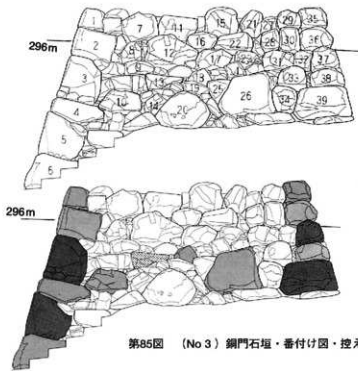
第82図 石材調査実施石垣位置図



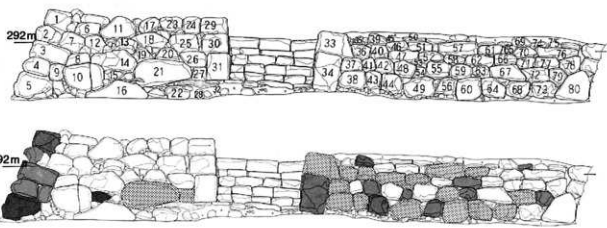
第83図 (No 1) 本丸北面石垣・番付け図・控え分布図



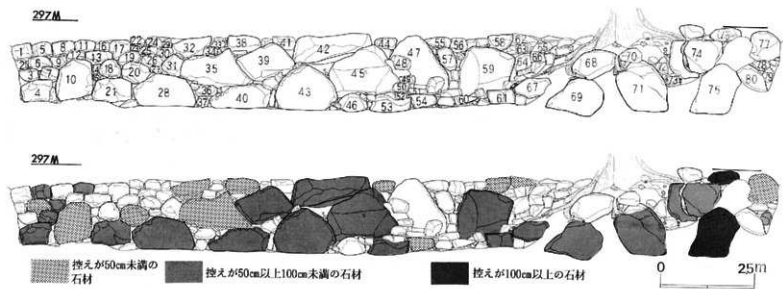
第64図 (No 2) 本丸西面石垣・番付け図・控え分布図



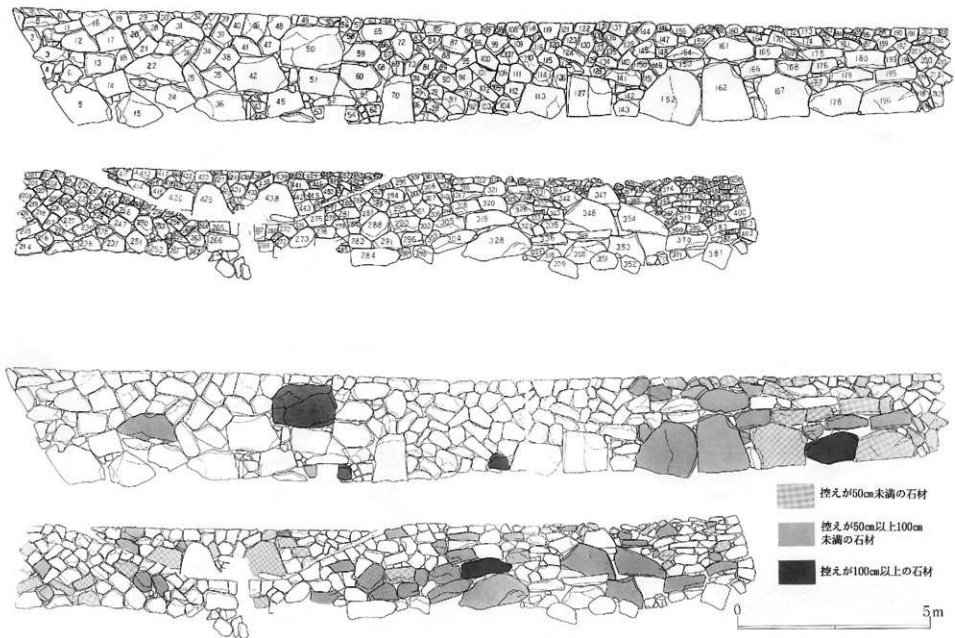
第85図 (No 3) 銅門石垣・番付け図・控え分布図



第86図 (No 4) 本丸腰石垣・番付け図・控え分布図



第87図 (No 5) 本丸腰石垣・番付け図・控え分布図

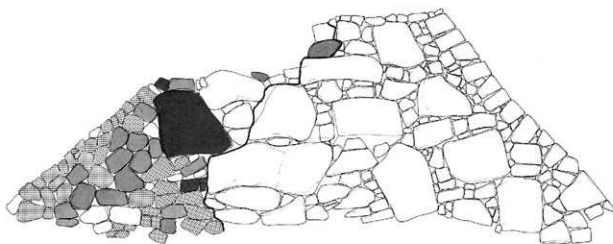
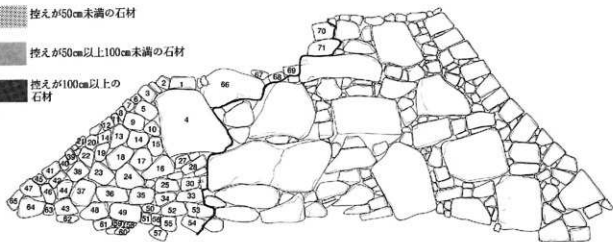


第88図 (No 6) 本丸南腰石垣・番付け図・控え分布図

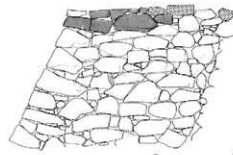
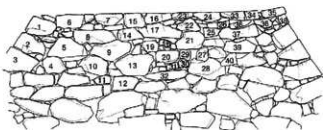
控えが50cm未満の石材

控えが50cm以上100cm未満の石材

控えが100cm以上の
石材



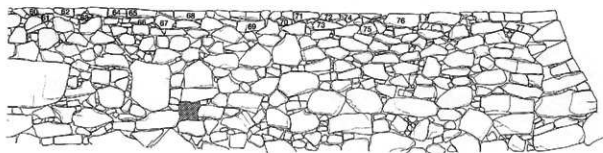
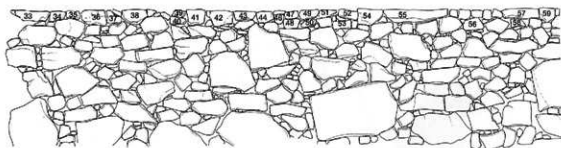
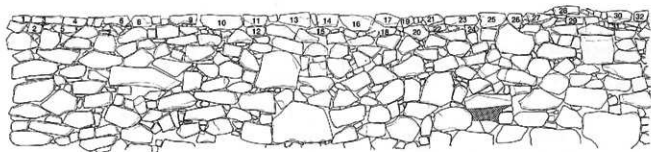
第89図 (No 7) 鉄門石垣・番付け図・控え分布図



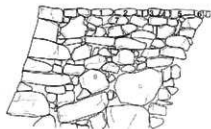
0 25m

第90図 (No 8) 本丸南石垣・番付け図・控え分布図

第91図 (No 9) 本丸南石垣・番付け図・控え分布図

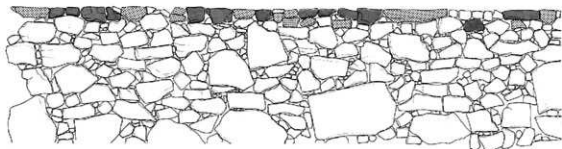
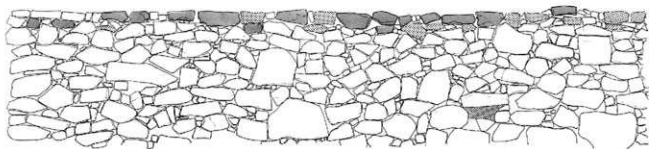


第92図 (No10) 本丸南石垣・番付け図






0 25m

第93図 (No11) 本丸南石垣・番付け図



第94図 (No10) 本丸南石垣



-  控えが50cm未満の石材
-  控えが50cm以上100cm未満の石材
-  控えが100cm以上の石材

0 25m

第95図 (No11) 本丸南石垣・控え分布図

第4章 遺物

第1節 瓦

過去4年間に調査した本丸を中心に、鉄門・銅門・天守曲輪・鍛冶曲輪西などで集中して出土した臈、鬼瓦、飾り瓦等の破片について接合整理した遺物の概要を記述するが、本年度の整理作業の中で新に出土が確認された92年度調査で出土した人質曲輪の遺物も紹介する。計測した数値は、縦横厚さともに最大値を、又推定復元可能な遺物については（ ）のなかにおよその数値を記した。完形でない瓦については、「残欠」と表記し、形状を推測できるものについてはその形状を記した。また、胎土については、粘土に含まれる砂粒子の多少と焼成によって、およそ2種類に分けることができ、一つは、多量の砂粒子が認められるものであり、表面の砂粒子が成型や調整のナデ時に砂粒子が動いた筋が全面に認められる。もう一つは砂粒子が少なく、胎土も緻密で表面と内部の焼成温度の相違による色の違いがある。前者を「粗」、後者を「密」として記した。表面に漆を接着剤として金箔を貼った瓦、水銀朱を塗った瓦、金箔と朱を施した瓦、「キラコ」と呼ばれる雲母粉を付着させた瓦の4種類が確認できるので、その有無についても記した。

1) 鬼瓦1 (第96~97図No1~19)

第96図No1は本丸北腰石垣の根石付近の調査中に検出した鬼瓦の右下の一部である。残存の大きさは、縦30.5cm横30cm厚さ9cm。これは鬼瓦右下部と思われ、模様は棒状工具による刺突模様で髷を表している。胎土は密。No2は本丸北腰石垣第3トレンチの調査中に検出した鬼瓦の左半分である。残存の大きさは縦36cm横23cm厚さ4.8cmを計る。裏面には反り(凹)を呈し、残存部分は粘土紐を利用した模様を残しているが、欠損が激しく判別できない。わずかに朱が認められ、胎土は粗い。No3は鉄門の調査中に検出された鬼瓦の破片である。残欠は縦8.2cm横10.2cm厚さ4.8cmを測る。表面には棒状工具による刺突線が8本確認できるが、髷もしくは髷ではないかと思われる。又金箔・朱なども確認されない。胎土は白砂粒を含み粗い。焼きムラにより表面と内部には色の差がある。No4は本丸北腰石垣第5トレンチの調査中に検出された鬼瓦の破片である。残欠は、縦11cm横9.8cm厚さ4.5cmを測る。形状は縁が整形され、やや曲面をもち鬼瓦の右下部の曲面と思われる。表面には棒状工具で刺突された模様が10本ある。鬼瓦の部位からして鬼の髷を想定する。金箔・朱は確認されず、胎土は白い砂粒を含み密。No3・4とともに同じ技法によって作られており、築城期の所産と考えられる。No5は本丸調査中検出された鬼面瓦の顎の一部で、No7・8同様に縦の沈線は歯を表現したものである。残存の大きさは縦9cm横14cmで線刻が3本あり、歯を表現している。又歯につながる部分からして下顎と判断できる。現状では、この瓦は臈瓦あるいは鬼瓦かは判断できない。表面は金箔・朱は確認できない。胎土は密。No6は本丸北西調査区第1集石の調査中に検出された瓦であるが、その性格は不明である。残存の大きさは縦12cm横13cm厚さ2cmを測る。形状は裏面に反りがあり、丸瓦等の上に据えたと考えられる。表面には楕円形の窪みが残っている。立体的な装飾が施されていたと考えられる。これは臈か鬼瓦かは判断できない。表面の金箔・朱は確認されていない。胎土は密。No7もNo8同様に本丸北腰石垣第1トレンチの調査中に検出した鬼面瓦の顎の一部である。残存の大きさは縦9cm横9cm厚さ2.5cmを測る。線刻が2本あり鬼の上顎と思われる。これは線刻の上部の鼻の穴の一部と思われる曲面が見られ、裏面も若干の曲面を呈している。表面には金箔・朱等は見られない。胎土は密。No8は本丸北第1トレンチの調査中に検出した鬼面瓦の下顎の一部で、上部に縦に入れられた沈線は歯を表している。残存の大きさは縦7cm横9.8cm厚さ2.2cmを測る。線刻が2本あり、鬼の下顎を思わせる曲面を呈している。胎土は密。第97図No9は本丸北腰石垣第3トレンチの南を調査中、地表から20cm下の瓦溜めから検出した鬼面瓦あるいは臈の顔面であろう。残存の大きさは縦22.4cm横13cm厚さ9.8cmを計る。形状は鼻、左小鼻、上唇、前歯が確認できる。鼻は撫での跡が見られ、丁寧な作りとなっている。裏面には丸瓦の上にそせるための曲面が造られている。今までに検出した臈

瓦と比較すると、全体の形は大きいものと思われる。胎土は白い砂粒を含み密である。No10は本丸南西に位置する坂下門階段内の調査中に出土した鬼瓦である。残存は縦16cm横11.4cm厚さ8.6cmを測る。肩にある反りからして鬼瓦の左肩の一部であろうと考えられる。前面には鬼瓦の耳と思われる厚さ2.5cmの楕円形をした飾りが1つ付けられている。又金箔・朱などは確認されなかった。裏面は整形されており、胎土は密。No11は本丸北西より出土した縦17cm横8cmを測る鬼瓦の一部であると思われるが、形態及び部位は不明である。胎土は比較的密で表面は黒色、表面から5mm程度が赤色、中心部は厚さ5cmで黒色である。No12は本丸北腰石垣第5トレンチの南を調査中に検出された。残欠は縦9.5cm横7cm厚さ4.3cmを測る。形状は鯉の耳を思わせる窪みを呈している。この窪みには金箔が施された痕跡を確認できる。胎土は粗い。No13は本丸北腰石垣第4区表土中に検出された。残欠は縦7cm、横4.2cm厚さ4.3cmを測る。形状は角状の突起であり、その突起の頂点に向かって棒状工具による波状の模様を線刻してある。これは鬼面の髪の毛か髭かと思える。金箔等は確認できないが、朱は認められる。胎土は密。No14は本丸北石垣根石付近の調査で、本丸櫓壁土堆積層中より出土した跨鬼瓦の右下の足の一部である。縦15cm横20cmを測り、2条の沈線(幅1cm深さ5mm)が彫られている。胎土は粗く、長石の粒子を含み灰色を呈する。No15は人質曲輪より出土した跨鬼瓦の右足の一部で、2本の沈線が彫られている。縦15cm横14cmを測り、胎土は粗く、細かな砂粒子を含み灰色を呈する。No16も跨鬼瓦の右足の一部である。幅2cm深さ1cmの2条の沈線が彫られている。縦14cm横15cmを測り、胎土は密で、長石の粒子を含み黒灰色を呈する。No17も跨鬼瓦の左足の一部で、鉄門から出土している。縦14cm横13cmを測り、2本の沈線と胎土がNo16と酷似している。No18も跨鬼瓦の左足の一部で、本丸北石垣根石付近の本丸櫓壁土層より出土し、縦9cm横8cmを測る。胎土や沈線の形状はNo14と酷似している。No19は本丸北西より出土した跨鬼瓦の雲の破片で、同心円状の段が3段確認できる。胎土は長石の粒子を含み密である。

2) 飾瓦 (第98~99図・No20~32)

No20は、人質曲輪の北側石垣根石付近より出土した粘土の隆帯を用いて花を立体的に表現した飾り瓦の左側上部の破片で、縦23.5cm横12cmを測る。No21はNo20と同様な瓦で人質曲輪北石垣根石付近より出土したが、破片から想像できる形状はNo15と対峙する右側上部であろう。No20・21の胎土は粗く全体に長石の粒子が認められる。No22は本丸北腰石垣第5トレンチの腰石垣根石付近の調査中に検出された浅野家紋鬼瓦である。残欠は縦33cm横28.6cm厚さ4.8cmで復元すると縦31cm横39cmある。表面にはヘラを用いた線刻による渦巻状き違ひ鷹の羽が描かれている。ただし今まで検出された軒丸瓦に表現されている違ひ鷹の羽と比較した場合、本来の浅野家紋に近い羽根の表現が線描き出されている。又表面には金箔は認められなかったが、わずかに朱は認められる。鬼板瓦と考えた場合屋根に止める際の釘穴跡はなく、裏面は整形されないままの指頭痕がみえる。胎土は長石、金雲母を含み密である。No23は人質曲輪より出土した縦11.5cm横9cmを測る桐紋瓦の葉脈の一部である。厚さ2cmの粘土板に葉脈を表現した粘土を張り付けたもので、破片の下と右は縁となっているので、分割して作成された飾り瓦の一部と考えられる。胎土は粗く粘土の間隙も目に付く。No24と25は人質曲輪から出土した金箔桐紋瓦の一部でそれぞれ縦7.5cm横5cm、縦6cm横4.5cmを測り、葉脈としては他の桐紋瓦と比較するとNo23同様に小さい。しかし、No24・25は粘土板に張り付けた部分が剥落したもので、金箔の残存は良好である。また、葉脈を篋で直線的に表現している点はこの桐紋瓦と異なる点である。No26は人質曲輪より出土した金箔付き桐紋瓦の花の一部で、胎土は赤黄色を呈して、長石の粒子を認める。No27は本丸北西より出土した桐紋瓦の左下の葉脈で、縦17.5cm横14cmを測る。この瓦の葉脈表現は、隆帯のように葉脈が浮き彫りになっており、他の桐門瓦の葉脈表現が沈線を描かれているのは大きく異なる。胎土は比較的密で、黄色を呈する。

No28は本丸北石垣の根石付近より出土した縦9.8cm横13.8cmを測る飾り瓦の一部で、胎土は少量の長石粒子を含み密、No29は金箔付き桐紋瓦の左下の葉脈破片で、縦10cm横11.5cmを測る。No30は人質曲輪出土の板状金箔付き飾り瓦の一部で、厚さ2cmの粘土板に厚さ2cmの飾りの粘土紐を張り付けたものであり、縦7cm横14cmを測る。胎土は赤黄色を呈し、長石の粒子を認められる。No31は鍛冶曲輪西花時計跡A1区1層を調査中に検出された飾り瓦の一部である。残存の大きさは縦11cm横7.5cmを測る。ヘラで弧状の沈線を描き、鱗を表現しているものと考え

られる。金箔・朱が確認される。胎土は密。No32は本丸北腰石垣第5トレンチの南を調査中に検出された瓦であるが、性格は不明である。残欠は縦7.5cm横9cm厚さ1.8cmを測る。棒状工具による模様が施されている。金箔は確認できないが、朱は認められる。胎土は密。

3) 鯉瓦 第99図 (No33~43)

No33は鉄門と銅門調査中に検出された鯉瓦の2片が接合したものである。残存の大きさは縦19cm横9.5cm厚さ3cmを測る。これは2カ所からのものが接合された。表面はへら等の工具により鱗が形どられている。背鱗1カ所確認できる。金箔・朱は確認できない。胎土は密。No34は人質曲輪から出土した鯉瓦の破片で縦13.5cm横7.5cmを測る。鱗の表現がNo33と酷似しているが、鱗と鱗の間に空間がある点は異なる点である。No35は人質曲輪より出土した鯉瓦の胴部の破片で縦12cm横9cmを測る。No33と同様に鱗の表現方法は縦で「∩」を連続して描いている。No33~35は鱗の表現技法が酷似しているため、同時期に製作されたものと考えられる。No36は銅門より出土した鯉瓦の鱗を表現する胴部の破片であるが、破片の下は縁となっているので、分割して製作されたものであろう。大きさは縦11cm横10cmを測る。鱗の表現が正円を描き、鱗と鱗の位置関係が千鳥になっているの比べると、No33・35は鋭削りで「∩」を連続して水平に描くことで、鱗を表現しており、技法が異なることは、製作年代あるいは製作集団の違いを意味している。胎土は長石や雲母を含み砂質が強い灰白色で締まっている。No37は鍛冶曲輪西花時計跡B1区第1層の調査中に検出された鯉瓦の一部である。残存の大きさは縦9cm横10cm厚さ4.5cmを測る。表面は小さめの鱗が表現され、また止め穴が1カ所確認される。金箔や朱は確認されない。胎土は密。No38は本丸北腰石垣第3トレンチの南を調査中に検出された鯉の尾鱗の残欠である。残存の大きさは縦8.5cm横4.5cm厚さ3cmを測る。凸凹の間隔は1.8から2.5cmである。一部に金箔と朱が確認できる。胎土は密。No39は本丸北腰石垣第5トレンチ南の調査中に検出された鯉瓦の尾鱗の残欠である。残存の大きさは縦8cm横7cm厚さ2.8cmを測る。片面にのみ凸凹が4本あり、この凸凹の間隔は1.5cmくらいである。金箔は確認できないが、微量の朱を認める。胎土は密。No40は天守台4区1層で検出された。鯉の鱗の一部である。残存の大きさは縦9cm横8cm厚さ2cmを測る。表面には深い凸凹があり、間隔は1.8から2.2cmを測る。微量の朱と金箔を確認できる。胎土は密。No41は本丸北腰石垣第5トレンチの南を調査中に検出された鯉瓦の尾鱗の一部である。残存の大きさは縦12.2cm横7.2cm厚さ2cmを測る。No42は鍛冶曲輪花時計跡A6区の調査中に検出された。池と推測される遺構の黒色土層の上で検出された。残欠は縦12cm横12cm厚さ4.2cmを測る。凸凹の間隔は3~3.5cmを測り、全面に朱の塗布がある。No43は人質曲輪出土の全面朱塗布片で、縦15cm横10cmを測り、中央に断面三角形の隆帯がある。

4) 家紋鬼瓦 (第100図No44~47)

No44は花菱家紋鬼瓦である。本丸西側で確認された地表から20cm下の瓦溜めから出土した。残欠は、縦22cm横42.5cm厚さ2.8cm、花菱の厚さ4.1cm控え8cmを測る。中央に位置する花菱紋は四つ花菱紋ではないが柳沢家の家紋を簡略に表現したものであると思われるので柳沢家が甲府に入った18世紀前半の所産と判断される。前面には雲母粉(キラコ)が大量に塗布されている。また花菱の両側には逆宝珠状の紋様が施されているが、金箔・朱などは確認されなかった。胎土は粗く黒灰色を呈する。(縦26cm、横60cm) No45は本丸南に位置する鉄門より出土した花菱家紋鬼瓦の残欠である。花菱の大きさがNo44と同じである。No46は本丸北西から出土した飾り瓦で、縦17cm横14.5cmを測り、胎土は黒色を呈して、表面にはキラコが認められる。また、破片の両側の面には広範囲に黄色の付着物認められる。No47は本丸北西から出土した鬼瓦で、縦27cm横30cmを測る。表面にはキラコが施されており、左右の袖に彫られた飾り文様も深く断面が鋭利である。製作時期は18世紀を測らない。

以上本丸を中心として出土した金箔や朱漆が施された鯉瓦・飾り瓦・鬼瓦などを中心に概観してきたが、出土地点は本丸北腰石垣調査区と称した銅門北側に集中する傾向が認められる。昨年度までは、調査区が天守台周辺に限られていたためか、出土範囲は天守台北側に限定していた。しかし、今年度の調査では本丸より直線距離で70m以上、比高差で25mを測る鍛冶曲輪の西側からも金箔が施された飾り瓦の一部(No20)が出土している。また、昨年度の調査では稲荷曲輪門東側から1点、昨年度も同所から1点出土している。これらの金箔瓦を中心とした特殊な瓦の多くが織豊期に製作されたものであることは、鯉瓦の鱗の描き方や鬼瓦の髭などの表現技法

から判断される。このような多くの金箔瓦が本丸を中心に出土しているからといって、城内各曲輪の建物に使用された瓦を、最も高い本丸まで運んで一括廃棄するとは考えにくく、本丸内から出土した多種多様な飾り瓦・鬼瓦・鯉瓦の多くが、本丸内の建物に使用されていたものであろう。その建物は本丸御殿・鉄門・銅門・本丸櫓などを想定することができよう。出土するであろう瓦との接合を試みながら不明瓦の解明を目指していきたい。

第2節 石造物

1. 上 臼

第100図No1は本丸北越石垣裏込栗石層で検出し、直径31cm、高さ15.6cmである。1/4の残存状況のため溝の単位は不明である。

2. 上 臼

同図No2は本丸北石垣裏込栗石層から検出し、直径29cm、高さ12.2cm、溝の単位8分割である。

3. 上 臼

同図No3は本丸北石垣裏込含栗石層から検出した。直径31.7cm、高さ12cm、溝の単位は8分割である。

4. 下臼（茶臼）

同図No4は天守台階段部から検出した。上径20.2cm、下径35cm、高さ14cm、受け皿の幅5.3cm、溝の単位は8分割である。

5. 下 臼

同図No5は本丸北石垣裏込栗石層から検出した。直径30.8cm、高さ14.4cm、溝の単位は8分割である。

6. 下 臼

同図No6は本丸北石垣栗石層から検出した。直径30cm、高さ12.7cm、溝の単位は8分割である。

7. 下 臼

同図No7は本丸北石垣栗石層から検出した。直径29.9cm、高さ12cm、溝の単位は8分割である。

8. 下 臼

同図No8は天守台から検出した。直径24cm、高さ12cm、溝の単位は8分割である。

9. 五輪塔（空・風輪）

同図No9は本丸北水抜き暗渠から検出した。縦18.5cm、横18cm、高さ10cmである。

10. 五輪塔（火輪）

同図No10は本丸北石垣栗石層から検出した。縦20.5cm、横20.4cm、高さ9.5cmである。

11. 五輪塔（地輪）

同図No11は本丸北石垣裏込栗石層から検出した。縦19.2cm、横19cm、高さ12.4cmである。

12. 五輪塔（地輪）

同図No12は天守台階段部から検出した。縦21cm、横21.9cm、高さ14.5cmである。

13. 五輪塔（空・風輪）

同図No13は本丸北石垣栗石層から検出した。高さ12cm、13cm、最大直径13cmである。

14. 宝篋印塔（基礎）

同図No14は本丸北石垣栗石層から検出した。縦25.4cm、横28.1cm、高さ18.3cmである。

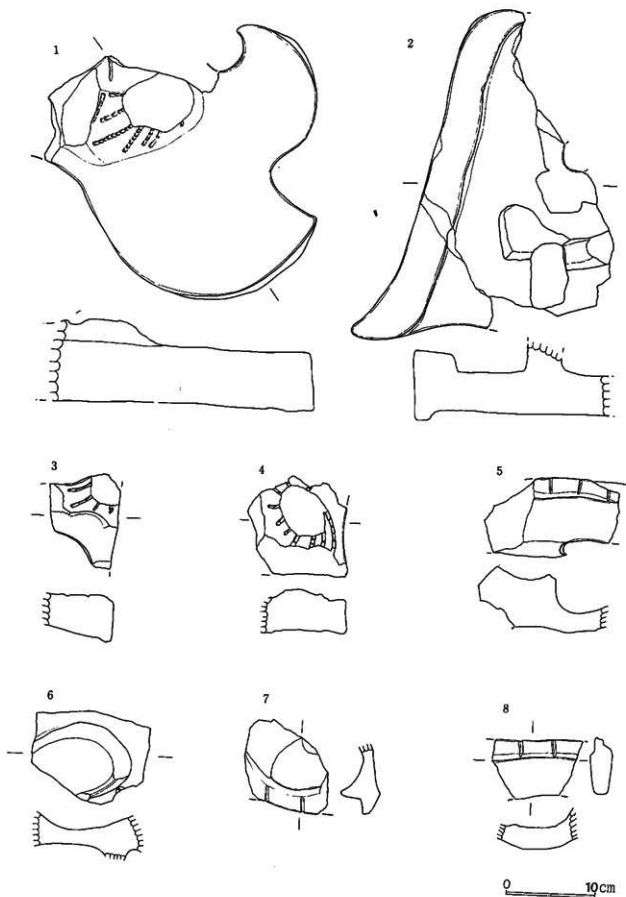
15. 宝篋印塔（基礎）

同図No15は本丸北石垣栗石層から検出した。縦27cm、横26.2cm、高さ24.5cmである。

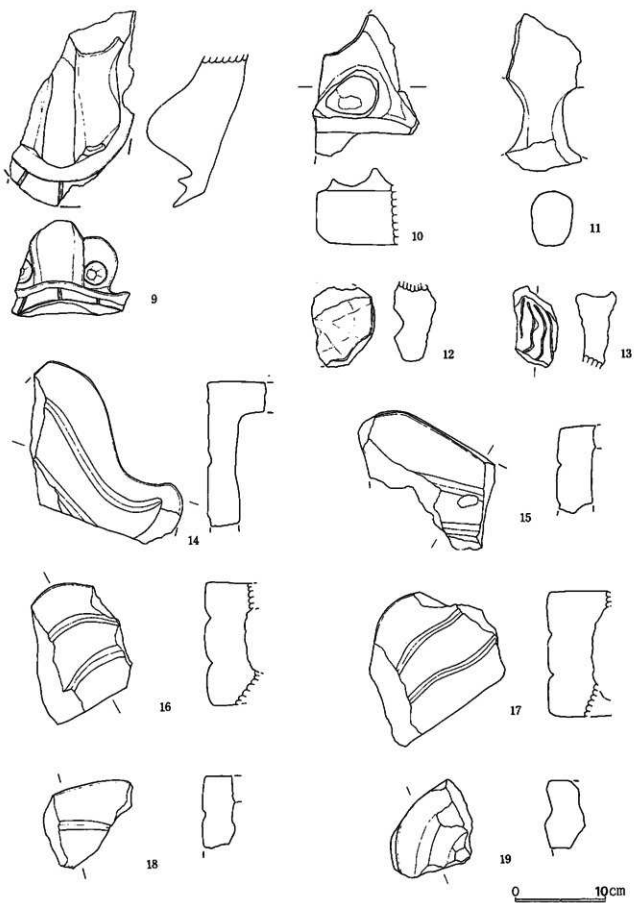
16. 宝篋印塔（基礎）

同図No16は本丸北石垣栗石層から検出した。縦27.5cm、横27.5cm、高さ23.5cmである。

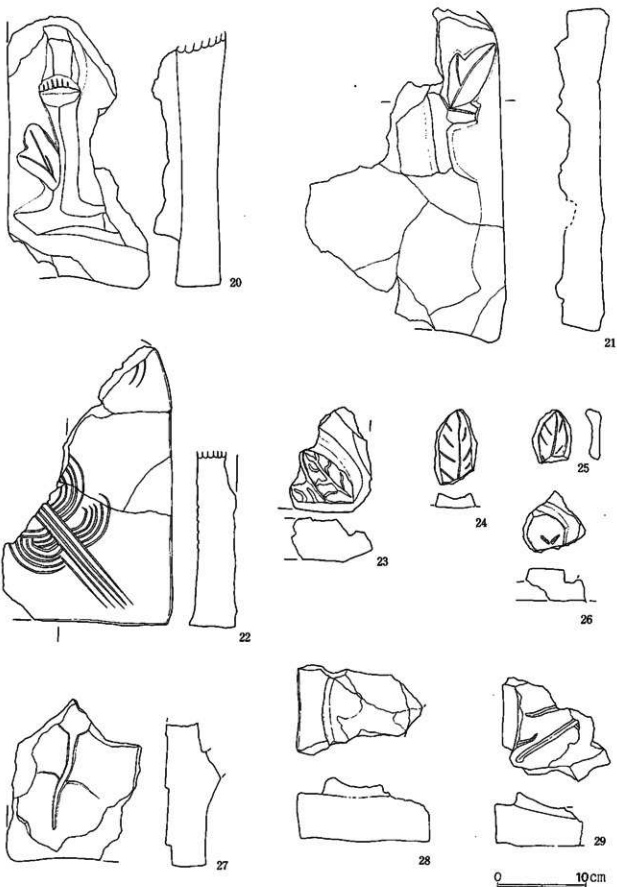
以上のうちNo7は角閃石輝石安山岩であり、それ以外は輝石安山岩とされる。



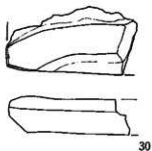
第96图 鬼瓦实测图



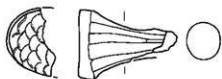
第97图 鬼瓦类测图



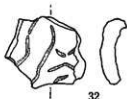
第98图 钵瓦实测图



30



31



32



33



34



35



36



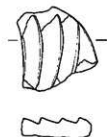
37



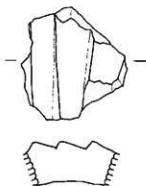
38



39



40



41



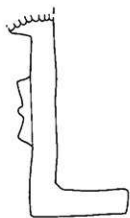
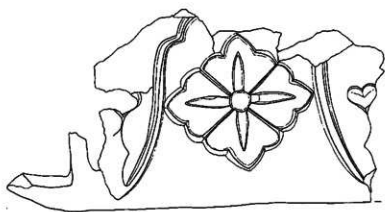
42



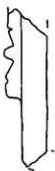
43

0 10cm

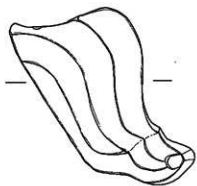
第99图 饰瓦·实测图



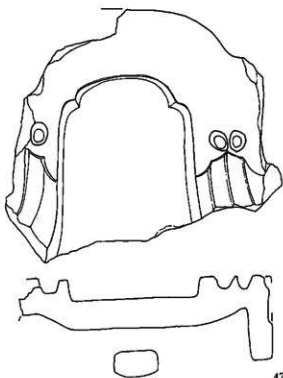
44



45



46



47

0 10cm

第100图 家纹鬼瓦实测图



1



2



4



11



12



13



第101图 遺物写真



16



17



22



21



25



26



27



29



30



第102图 遗物写真



31



31



33



42



36



37



41



40



35



44



43

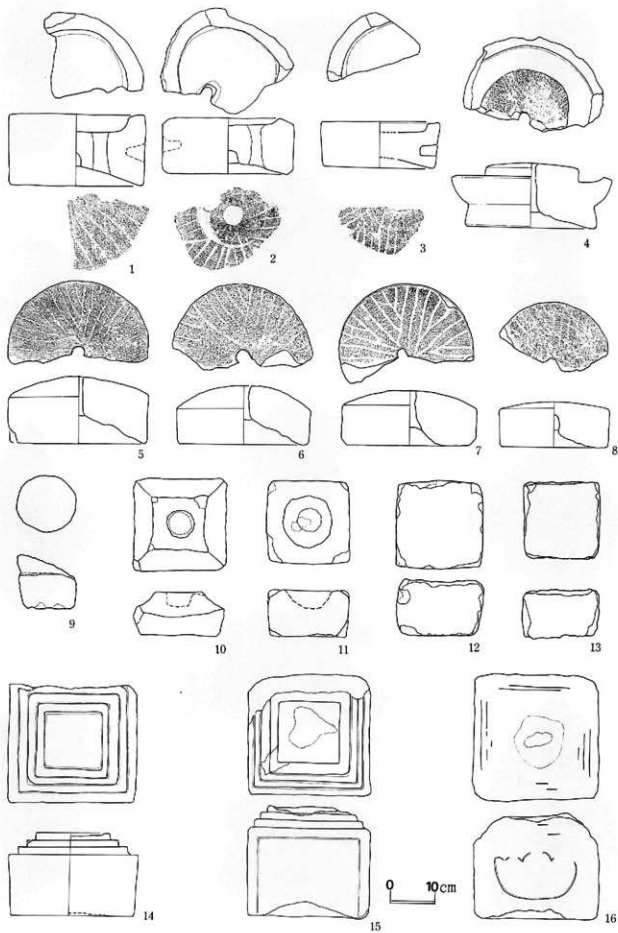


47



46

第103图 遗物写真



第104图 石造物



1



2



3



4



5



6



7



8



11



10



12



13



14



15



16

第105回 石遺物

『山梨県指定史跡甲府城跡Ⅳ』概要

フリガナ	ヤマナシケンシテイシセキコウフジウセキⅣ	
書名	山梨県指定史跡甲府城跡	
シリズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第93集	
執筆者(五十音順)	柏木秀俊・村松利恵子・八巻与志夫	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 0552(66)3881	
印刷所	山梨県甲府市丸の内1-14-6 彌ヨネヤ	
印刷日・発行日	1994年3月25日 1994年3月30日	
所在地	山梨県甲府市丸の内1丁目地内	
25000分の1 地図名・位置	甲府南部	北緯 35°24'39"
		東経 138°39'39"
		標高 304㍍
概要	主な時代	戦国時代～江戸時代
	主な遺構	近世初頭の城郭石垣
	主な遺物	近世瓦、石造物
	特殊遺構	
	特殊遺物	金箔瓦(飾瓦・鯉瓦)
調査期間	1993年4月～1994年3月	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第93集

1994年3月25日 印刷

1994年3月30日 発行

山梨県指定史跡

甲府城跡Ⅳ

発行 山梨県教育委員会
山梨県土木部

印刷 株式会社ヨネヤ

